

りぶ・らぶ・あにまるず国際シンポジウム 2003

『高齢者と伴侶動物の楽しい暮らし』

2003 LIVE LOVE ANIMALS - AN INTERNATIONAL SYMPOSIUM

'A Joyful Life for Older People with Animals'

2003年国際シンポジウム記録集



神戸市 / NPO法人Knots  
Kobe City , NPO Knots

# 目 次

りぶ・らぶ・あにまるず国際シンポジウム 2003

## 『高齢者と伴侶動物の楽しい暮らし』

開催概要	p. 2
冒頭スピーチ	p. 3
話題提供	
『コンパニオンアニマルと暮らす 高齢者のライフスタイル 英国のシステム・現状と課題』 エリザベス・オームロッド / 英国 SCAS (Society for Companion Animal Studies) 会長	p. 4
パネラースピーチ	
備酒伸彦 / 兵庫県但馬県民局但馬長寿の郷 企画調整部 地域ケア課 主査	p. 23
松田早苗 / (社)日本動物福祉協会 阪神支部 副支部長	p. 29
館石宗隆 / 厚生労働省老健局計画課 課長補佐	p. 34
パネルディスカッション	p. 41
座長 山崎恵子 / ペット研究家	
パネラー エリザベス・オームロッド 館石宗隆 備酒伸彦 松田早苗	

## 開催概要

りぶ・らぶ・あにまるず国際シンポジウム 2003

### 『高齢者と伴侶動物の楽しい暮らし』

開催日 2003年11月1日(土) 13:00-16:30  
時 神戸 ポートピアホテル 本館2F 「コスモポリタンルーム」  
開催場所 社会的に最も弱い伴侶動物と、高齢者の暮らしをクローズアップすることにより、  
目的 弱者に優しいまちづくりに必要な社会システムを考察し、以って、動物愛護精神  
を涵養し、人と動物が真に共生できる社会構築の一助とする。  
神戸市／特定非営利活動法人 Knots  
主催 ネスレピュリナペットケア株式会社  
特別協 アサヒビール株式会社／近畿タクシー株式会社  
賛 (財)中内カコンベンション振興財団／(株)損保ジャパンちきゅうくらぶ  
協 賛 環境省／厚生労働省／兵庫県／兵庫県教育委員会／神戸市教育委員会／  
助 成 (社)兵庫県獣医師会／(社)神戸市獣医師会／(財)日本動物愛護協会／  
後 援 (社)日本動物保護管理協会／(社)日本動物福祉協会／  
(社)日本愛玩動物協会／(社)日本動物病院福祉協会／  
在大阪連合王国総領事館

- ・座長  
山崎恵子／ペット研究家
- ・話題提供  
エリザベス・オームロッド／英国 SCAS 会長
- ・パネラー  
館石宗隆／厚生労働省老健局計画課 課長補佐  
備酒伸彦／兵庫県但馬県民局但馬長寿の郷  
企画調整部 地域ケア課 主査  
松田早苗／(社)日本動物福祉協会 阪神支部 副支部長

## 冒頭スピーチ

### 富永佳与子

(NPO 法人 Knots 代表)



本日はお忙しい中、沢山のご来場を頂きまして有り難うございます。NPO 法人 Knots の代表を致しております富永でございます。本日はよろしくお願ひ致します。

私共は人と動物が安心して住める社会の実現に向けて様々な活動をさせて頂いております。今回で3回目になりますけれども、本年度も神戸市との共催で「りぶ・らぶ・あにまるず国際シンポジウム 2003 高齢者と伴侶動物の楽しい暮らし」を企画させて頂きました。近年動物と高齢者の方につきましては色々な試みがなされておりますけれども、とりわけ元気な方についてはまだまだ関心が向いていないと思います。しかし、元気な方もいつ何時、そういう危機を迎えるか分かりません。

そういう時にセーフティーネットがあれば、これまで培ってきた伴侶動物との暮らしを楽しんで頂けるのではないかと思います。

本日は特に普通に暮らしておられる元気な高齢者の皆様が伴侶動物と安心して暮らせる社会システムはどうしていけばいいのか、皆さんが余計な心配をせずに暮らしていけることこそ楽しい暮らしではないかと考えまして、今回のシンポジウムを企画させて頂きました。これから迎える高齢化社会の中で伴侶動物との暮らしのヒントを各界でご活躍の専門家の皆様より頂けるのではないかと思います。私のおしゃべりはこれまでと致しまして、早速シンポジウムの方に入らせて頂きます。まず最初に本シンポジウムの座長の山崎恵子様をご紹介させて頂きたいと思ひます。

山崎様はペット研究会「互」を主催され、人と動物における様々な問題に取り組んでおられます。勿論国際的な事情についても大変精通しておられます。特に現在は介助犬アカデミーの他色々なお仕事もされておられて、そういう意味では、私達の知恵袋とも言うべき存在でございます。このしっかりした方を座長に迎えましてシンポジウムを進めさせて頂きます。それではマイクを山崎様にお渡ししたいと思います。よろしくお願ひ致します。

### 山崎恵子

(ペット研究家)



知恵袋というよりはもう年齢としては富永さんのお袋さんという年齢になってしまいました。山崎でございます。つたない座長でございますけれども終了時間までお付き合ひをよろしくお願ひ致します。それでは、話題提供をなさいます、英国SCAS現会長のエリザベス・オームロッド先生をご紹介申し上げます。プロフィールをお読み頂ければオームロッド先生はどういう方であるかはお分かり頂けると思ひますが、プロフィールの中にちょっと書かれていないようなことを一つ二つ申し上げれば、プロフィール通り獣医師の資格を持っておられる先生ですが、現在会長をなさっておられます、SCASというのはソサエティ・フォー・コンパニオンアニマル・スタディーズ、コンパニオンアニマル研究会と翻訳されています。実は1970年代の後半から80年代にかけて、世界で人と動物の関係学或いはヒューマンアニマルボンドという研究を進め始めたビッグ4、4つ団体がございます。その一つの柱という団体です。ですから人と動物の絆という意味では老舗の団体なんですね。ちなみにこの先生の基調講演の最後にご紹介があると思ひますが、実は老舗の団体プラスそれからヒューマンアニマルボンドの研究に加わった新たな世界各国の団体が、3年に一度人と動物の関係に関する国際会議というのを開いておられて、教育やセラピーそれから倫理等様々な分野における人と動物の接点を色々な分科会で論じ合う非常に素晴らしい場です。2001年リオで大会が開かれまして来年2004年は世界大会の年でございます。今回は実はオームロッド先生が会長をなさっているSCASが世話役としてスコットランドのグラスゴーで来年の10月6日から9日まで国際会議が開かれますので、その宣伝も最後の方でして下さると思ひます。皆様方もご関心があれば、是非来年はその時期にイギリス旅行を計画して頂きたいと思ひます。オームロッド先生は実は介助犬のことやそれからセラピーのこと等、非常に人間の医療や福祉に関わる動物の様々な研究をなさっておられる先生でありますので、今日は私も彼女がどういってお話をされるのか大変楽しみにしてまいりました。それではオームロッド先生にお願ひ致します。

## 話題提供

### 『コンパニオン・アニマルと暮らす 高齢者のライフスタイル』

#### —英国のシステム・現状と課題—

エリザベス・オームロッド BVMS MRCVS,

英国SCAS (Society for Companion Animal Studies) 会長



皆さんこんにちは。今日、ここに皆さんと一緒に、高齢者とコンパニオンアニマルの持つとても特別な関係について情報を共有しあえることを、大変喜ばしく思っています。私は英国のヒューマンアニマルボンドの団体、SCAS (Society for Companion Animal Studies) 【スライド1】を代表して参りました。



【スライド1】

まず、SCASについて紹介します。それから英国におけるコンパニオンアニマルと高齢者の課題について、良い事例、悪い事例を交えて説明し、問題解決に向けての取り組みについてお話しします。

そして最後に将来に向けてのビジョンを皆さんと共有したいと思います。そこにあるのは、私たちが皆ヒューマンアニマルボンドの可能性に気づき、コンパニオンアニマルとのパートナーシップをどのように築けばよいかを理解し、人間、動物両方にとってより健康で質の高い生活が出来る世界だと思えます。

SCASは、人と動物のインターアクションの効果について着目しているチャリティー組織団体です。この団体は1979年、スコットランドで、ある健康やソーシャルケア専門の研究者の小さなグループによって設立されました。この分野の研究は今ではヒューマンアニマルボンドと呼ばれていますが、動物は我々人間を、沢山の様々な、そして時に想像を絶する場面で支援し、介助してくれていることを立証しています。例えばコンパニオンアニマルは子どもの成長期に、社会性を身につけ、自尊心を育てるのに大変重要な役割を果たします。障害のある人たちは介助犬の力を借りて、他の人たちと社会的に交わったりし、感情面、社会面で高いサポートを受けることが出来ます。

#### SCASの目的【スライド2】

SCASのメンバーは、医学、獣医学、教育、ソーシャルワーク、動物福祉、動物生態学および行動学などを含む、健康およびソーシャルケアの専門家から集まっています。

(一年前、SCASは英国の最も大きな動物福祉団体であるブルークロスとパートナーシップを結びました。)

#### SCASの目指すもの

- ※ヒューマン・アニマル・ボンド(人と動物の絆)についての理解を促進する。
- ※ボンド(絆)に関する情報を発信する。
- ※責任ある姿勢で 人間と動物のクオリティー・オブ・ライフ (生活の質)を奨励する。

【スライド2】

ヒューマンアニマルボンドとは多岐にわたり複雑な研究分野であり、どの学問分野でも単独ではこの特別なボンド(絆・関係)のしくみについて、十分に理解することが出来ないのです。各分野の専門家が、知識と経験を持ち寄りなければなりません。

#### HCABの可能性

- 創造的なプログラム
- 分野を超えた共同研究
- プロの育成
- 動物の社会的地位および福祉の改善
- 学科を超えた共同研究
- 友情

【スライド3】

#### HCABの与えてくれる機会【スライド3】

ヒューマンアニマルボンドへの関わりは、沢山の可能性を与えてくれます。

例えば、

- 学際的研究の機会
- 専門家としての発達
- クライアント(患者さん・飼い主さん)を助けるためのクリエイティブなプログラム
- 動物の社会的地位および動物福祉の改善
- 部門を越えた協力体制
- フレンドシップ(友情)

ヒューマンアニマルボンドのプログラムは、分野、学部を超えたコラボレーション(共同研究)をする、ユニークで類をみないような機会を提供してくれます。違った分野が協力することで、強い相乗効果が生まれるのです。

人間、動物そして環境を思いやる人たちの間に、素晴らしい友情が生まれます。

今日ここでは、高齢者と彼らのコンパニオンアニマルとの関係をとりまく問題について検証して行きます。

故ボリス・レヴィンソン博士は、人間の健康を促進し、維持するために、このボンドの持つ可能性について健康の専門家たちに提言してきました。彼は動物に触れることが、精神衛生上大切であると信じていました。【スライド4】

「多くのお年寄りや一人暮らしの人たちは、ペットによって人間に必要な感情が満たされるのだと気づきます。……現実の世界と結ばれ、心配や苦勞、雑性など深い感情の関係を、動物の世話をすることで、体験します。そして自分たちは価値のある人間なのだという確信を取り戻し、その自信は、かわいがっているペットが自分たちに愛情をもって報いてくれることで、更に強化されるのです。」

Levinson  
レヴィンソン

【スライド4】

多くの高齢者にとっては、特に一人暮らしをされている場合、ペットが最大の友なのです。英国では65～75歳の人口の三分之一が自宅で一人暮らしをしています。コンパニオンとしての動物は、フレンドシップ、憩い、そして支援を提供してくれ、安心感と自信を与えてくれます。

### 健康への効果

- コレステロール、トリグリセリド、血圧を下げる。
  - 心臓・血管疾患の原因となるもの
- 神経伝達物質を増やす。
  - ドーパミン、フェニエチラミン、セロトニン
- 心臓発作、脳卒中後の生存率を上げる。
- 全体的に健康を改善させる。
  - 通院、処方が減り、健康に注意する。
- 精神状態が落ちつき、痴呆症状があっても社交性が改善される。
- 日常生活の中での活動(ADL)がよりうまくできる。

【スライド5】

### 動物コンタクトの利点【スライド5】

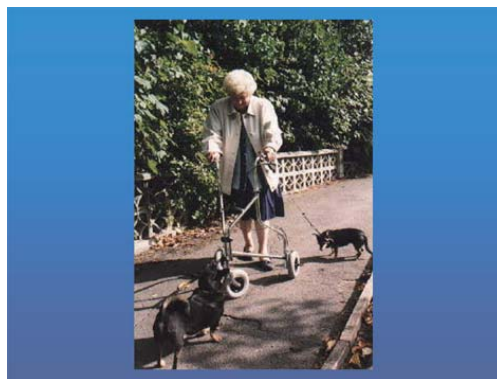
動物と触れることで得る健康への効果には以下のようなものがあります。

ペットの面倒を見ることで、高齢者にとってはなかなかない、育てること、そして育てられることの機会が与えられます。また動物は、もっと触覚的な要因も提供しています。これは今では健康維持のための大切な要因であることが認められているのです。ペットの面倒を見るという仕事は日々ルーチン、日課を与えます。オーナーは毎朝ちゃんと起きてペットの様子をチェックし、食事を与えなければなりません。【スライド6】

そして犬は運動させなければなりません。【スライド7】猫なら飼い主と一緒に庭を散歩します。そこで通りすがりの人や近所の人たちと話す機会が出来ます。これは



【スライド6】



【スライド7】

社会潤滑油的效果として知られています。そしてこのことがペットオーナーには友達や知り合いが多い理由なのです。多くのペットオーナーは、特に一人住まいの場合、自分のペットと同じ時間に食事をしています。ペットの食事を用意するとき、自分の食事もしっかり準備し食べなければならないと考えるのです。ペットオーナーは自分のペットに語りかけます。ペットはとてもよく話を聞いてくれ、批判的でなく、そして決して二人(?)だけの秘密を口外することはありません。ペットと話すとても良い気分になれます。またコンパニオンアニマルということで人は自分自身のことにとらわれすぎたり、病気のことに過剰に心配したりすることを防いでくれます。またペットオーナーは自分の家を暖かく保ちます。ペットのために!

人は人生の後半で様々なものを失うことを体験し、その度に人生が大きく揺さぶられ、強力なサポートを必要とします。

失うものの中には退職とともに失う仕事やルーチン、力やスタミナ、地位、友達、そして伴侶に先立たれることもあります。多くの高齢者は経済的または健康の理由から自分の家も失って、小さな家に引っ越さなくてはならなかったり、施設に入らなければならなくなったりします。

このような生活の変化はストレスをもたらします。失うことを次々と体験することは大変なストレスで、高齢者の健康に影響を及ぼすこともあります。

しかし、ペットとの深い関係があれば、このような悲しい体験や人生の変化を切り抜けるサポートをしてくれるのです。動物が死別などのような強烈な人生のイベント時には、ショック吸収材の役割を果たしてくれるのです。そしてペットが故人との大切な絆になることもあるのです。

高齢者にとっては、ペットの世話をすることは、生きがいを感じる事なのです。生活の中に役割がある、必要とされている、やらなければならないことがあるという実感です。必要とされているということを感じることの必要性を、私たちは決して過小評価してはいけません。健全な自尊心を保つためには、私たちはみんな何か貢献しているのだという気持ちを持つことが必要なのです。【スライド 8】



【スライド 8】

人間は社会動物であり、健康を維持するためには、コンパニオンシップや社会的接触が必要なのです。幸運にも、私たちにとっての友達は、何も人間に限らなくても良いのです。

英国は、他の国々同様、これまでに類を見ないような人口構成の変化を経験しています。高齢化が進み、60歳以上の人口が16歳以下の人口を上回ってしまいました。将来には不安があります。少ない人口の若者で、どうやって増えていく高齢人口を支えていくのでしょうか。

SCASはヒューマンアニマルボンドが解決の一部を担うことが出来ると確信しています。ウエールズ大学の計算によれば、ペットのお陰で年間300万ポンドの医療費節約になっているということです。この調査はペットを飼っている人のみを対象にしていて、AAA/AATや介助動物などは含まれていません。

SCASは政府のために、高齢者の生活におけるペットの役割についての報告書をまとめました。この中で私たちはヒューマンアニマルボンドの治療的価値をもっと活用し、そのためにもっと前向きなペット条例を住宅や老人施設などのために施行すべきであると言ってきました。

ドイツの心理学者、オールブリック博士は、高齢者に

「人間をその他の様々な生き物から切り離すことは、親しんできた環境との関わりをそこなうだけでなく、人間の行動範囲や経験を制限することになる。このようなことは、人間の成長を妨げ、時に病気に導くことにもなる。多くの科学者は、技術の進歩は、自然や動物との深い関係と相補性を保つ必要があることを認識している。」

Olbrich  
オールブリック

【スライド 9】



【スライド 10】

とっては他の人間、動物そして自然とのふれあいがより一層大切になると言っています。【スライド 9】

SCASはIAHAIO (International Association of Human Animal Interaction Organizations) 【スライド 10】 の設立メンバーです。IAHAIOの仕事の成果は最近、WHOに認められました。1995年、ジュネーブでIAHAIOの5つの基本決議案が採択されました。IAHAIOは全ての国際的関係機関と各国政府に以下の決議【スライド 11-15】について検討し、実践するよう、強く求めています。IAHAIOはこれらの決議を、コンパニオンアニマルが人間の健康や成長、そして生活の質に与える様々な効力について、研究によって立証された

### IAHAIO 決議 1



ペットが正しく世話をされて、ペットを飼っていない人の権利を侵害しない場合、世間一般的に、差別することなく、全ての場所での妥当な状況下において、ペット所有者の権利を認める。

### IAHAIO 決議 2



人の生活環境が、ペットやペット所有者の特殊なニーズを考慮した上で計画され設計されたものであるよう、適切な手段をとる。

### IAHAIO 決議 3



管理されたコンパニオンアニマルの学校および学校カリキュラムへの導入を促進し、適切な研修プログラムを通じて教員や教育者にコンパニオンアニマルの存在の効果を確信してもらう。

### IAHAIO 決議 4



病院、老人ホーム、その他触れ合いを必要とする全ての年齢の人たちの施設への、管理されたコンパニオンアニマルの出入りを認知させる。

### IAHAIO 決議 5

障害を乗り越えるための介助をするよう、特別にトレーニングされた動物を、治療への有効な関与であることを公式に認めさせ、そのような動物を育成するためのプログラム開発を推進し、健康や社会福祉サービスに携る専門家たちの基礎研修の中に、これらの動物の幅広い能力について学ぶ機会が確保されていること。

【スライド 11-15】

ことに対する回答として作成したのです。我々の生活の中における動物の存在を可能にし、調和のとれたコンパニオンシップを約束するためには、飼い主、政府両方に果たさなければならない義務と責任があります。

高齢者に影響する決議1、2、4、5に対して、英国はどのような状況になっているのでしょうか。

決議1について【スライド 16】

### IAHAIO 決議 1



ペット所有者みんなに差別のない権利を！

【スライド 16】

#### 1. ペット所有者みんなに差別のない権利を！

英国はこの決議に従っていません。ペットオーナーたちは、特に私の借家や行政の集合住宅、老人用住宅などでしばしば差別されています。ペットに関する規則が勝手に作られ、不平等に適用されています。SCASはペットを飼っているテナントの人たち、特に弱者である高齢者への不当な扱いに対し非常に懸念を抱いて

います。彼らはしばしばペットを手放さなければならない状態に追い込まれています。

私が獣医として最も胸の痛いののは、引っ越しをせねばならず、「動物を処分するように」と命じられた孤独な高齢者への対応をしなければならないときです。【スライド 17】



【スライド 17】

このような人たちは本当に錯乱状態にいます。私の診療所に泣きながらやってきて、ストレスに打ちのめされ、何故診療所にやってきたのかうまく説明も出来ないような状態になっています。大半の場合、様々な肉体的症状、呼吸困難、胸の痛み、嘔吐、吐き気、拒食、不眠などを訴えます。どんな人にとっても、不治の病に苦しむ動物を連れて、最後の獣医への訪問をするのは苦しいことであるのに、高齢者が今まで愛してきた健康なペットを、心無い規則のために、安楽死させなければならないなんて、全く不正で不道理です。

このような行為は飼い主に限りない罪の意識を持たせ、中には立ち直れずに、そのままつ状態に陥ってしまう人もいます。将来シェルター（老人用住宅）に入らなければならないかもしれないという心配のある高齢者はペットを飼うことをあきらめます。【スライド 18】



【スライド 18】

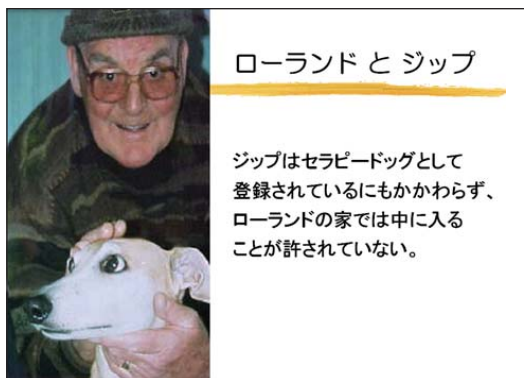
ターで動物を禁止することは全く不必要で、高齢者やペットに深刻なダメージを与えます。幾つかの集合住宅ではペットを飼うことを禁止しているだけでなく、ペットが訪問することも禁じています。このような場合、元飼い主がペットに会うことすら出来ないのです。このような規則を適用する家主は、入居者の生活の質（クオリティオブライフ）より、自分が出来るだけ楽に過ごせるよ



うにすることを考えているのです。彼らの理由は、もしペットを許したら、ペットに関する問題が発生するであろう、そして禁止しておけば問題が少なくてすむというものです。しかしながら最近の研究で、集合住宅にもペットが全体的に良い影響をもたらすということが明らかにされました。つまりペットを禁止することで、家主（管理者）たちは無意識のうちにも、もっと問題を作り出してしまっているのです。例えばペットを飼うことを許されていない所では、人間も非社会的になり、薬物や酒に手を出す人が増えます。私は最近かなり上の肩書きのハウジング関連の役員から、こんなアドバイスをもらいました。「住宅管理者は入居者のもたらすいかなる問題も解決する能力を持たねばならず、それにはペット関連の問題も含む。彼らはそのように養成され、そのために給料をもらっているのだから。」

英国でいかに邪悪な状況が高齢者を苦しめ続けているのか、私の年配のクライアント（患者さん）を少し紹介させて頂きながら説明しましょう。

イエオマンさん【スライド 19】と奥さんは4階建ての集



ローランド (Mr. イエオマン) とジップ 【スライド 19】

合住宅の4階に住んでいました。健康状態が悪くなって来たため、階段の上り下りが困難になってきました。医者は彼らに1階に移らなければならないと言いました。そのころ、通り一本分の新しい老人用住宅が建設され、その半分が地元の行政の管轄となりました。入居規則には、今いるペットは連れて入っても構わないが、そのペットが死んだ後は次のペットを飼うことは出来なくなっていました。住宅のもう半分は民間の住宅供給



ハットフィールド通り 【スライド 20】

会社の管理下となり、ペット全面禁止となり、残念ながらイエオマン夫妻にあてがわれたのはこの民間の方の住宅でした。イエオマン夫妻は私のところに相談にられました。夫妻のペットの小型犬、ジップは夫妻にとって子どものようなものです。彼のお医者さんはそれでも、速やかに1階の住宅に移らないと、心臓発作を起こす危険があると警告しました。その他に移れるような住居はみつかりませんでした。それでも何とか我々は、解決法のようなものを見つけました。【スライド 20】

もう一人のお年寄りに、ホールデンさん【スライド 21】



Missホールデン 【スライド 21】

という女性がいました。その人は少し離れたところに住んでいて、その人が夜間、ジップの面倒を見てくれることになったのです。ジップは夕方この家に来て、朝になるとイエオマンさん夫妻が迎えに来てくれ日中を共にすごします。イエオマンさん夫妻がジップと大方の時間すごすところは新しい家ではなく、近くの老人ホームです。何故ならジップは皮肉にもセラピードッグとして登録されていて、高齢者たちをなぐさめ、なごませてくれるということで、地元の老人ホームでは歓迎されていたのです。全くばかげた状況でした。

私の他のクライアントも何人かこの住宅に入居し、ペットは飼い続けようと決意しましたが、住宅管理人には隠して飼っていました。しかしある日猫のえさのお皿が見つかってしまい、28日以内にペットを処分するかもしくは立ち退きをするように命じられました。高齢者にとってこのようなストレスに対応するのは耐えがたいことです。まるで悪夢でした。入居者は彼らのペットを溺愛していました。ある老人が私に言いました。「オームロッド先生、私は結婚したことはありません。子どももいません。でもスージーは、私の孫娘なのです。別れることなど出来ません。」スージーは12歳で、てんかん持ちでした。新しい飼い主など探せません。離れ離れにしたらこの老人は死んでしまうでしょう。

入居者たちと共に、私はペットを飼うポリシー（政策）案を製作しました。そしてそこに、それまでに明らかになっている高齢者の健康への利益を書いた書面を添付し、管理者の役員会に提出されました。ペット禁止令は廃止となりました。この政策の成功の鍵は、必要

とあれば引き取りケアセンターとしてバックアップ出来る獣医が関わったということです。またこの政策には入居者に新たなペットを飼うことも許可しています。これは獣医がその動物の選択に関わるということを前提としています。この住宅協会は今では町一番の政策を持っています。

悲しいことに、私の地元の行政は、ペットや住宅事情についての話し合いに何の興味も示してくれません。ミーティングを要求してもことごとくうまくいきません。地方行政は、国（中央政府）からは何も指示されていないと彼らは言います。しかし面白いことに、政府はこれは地方行政の問題だと言います。

ヒューマンアニマルボンドを大切にしてくれないのは、何も住宅供給者だけではありません。ソーシャルワーカーの中にも、クライアントにとって何がベストか知っているつもりで、オプションがあるかどうかの検討もしないままに、クライアントのペットを安楽死させることを勧める人がいます。ソーシャルワーカー、そして高齢者に関わる人たち全てが、ペットの重要性について認識しているべきなのです。

**アンカーハウジング トラスト**



- ※ 最大のシェルターハウス提供会社
- ※ 30年以上に渡り、積極的なペット方針に取り組んできた。
- ※ ペット関連の問題は数少なく、いつも解決可能である。

【スライド 22】

**アンカーハウジングトラスト【スライド 22】**

アンカーハウジングトラストは、英国でも最良の模範を提供してくれています。アンカーは英国のシェルター住宅の供給会社として最大手です。そして常にペット政策について前向きな姿勢をとってきました。このチャリティーの精神では、高齢者は尊厳を持って接せられるべきであり、彼らの望みは尊重されるべきであるというこ

**アンカーの調査**



- ※ 英国では毎年、140,000匹のペットが捨てられている。
- ※ 38,000匹が安楽死させられている。
- ※ 高齢者とペットを守る法律が必要である。

Don't leave a friend behind

(友だちを置いていかないで！)

【スライド 23】

とです。高齢者にはペットを飼う飼わないを含み、ライフスタイルの中で選択が与えられるべきです。報告によると、ここ30年間以上の中で発生した問題で満足に解決できなかったものはないということです。

1998年のアンカーの調査【スライド 23】によると、年間14万人の高齢者が住居の規定のせいでペットをギブアップしなければならない状況に追い込まれているそうです。3万8千匹もの動物が安楽死させられています。こんな状況は決して許されるものではありません。

アンカーが、ペットを飼っている高齢者に、彼らが入居を決意するホームの要因に関するアンケートを行いました。これが結果です。【スライド 24】


**老人ホームを選ぶ理由**

- ※ ペットの入居を許可している .....76%
- ※ 親戚や友人の家に近い .....72%
- ※ 安全で安心である .....67%
- ※ 店やサービス提供施設に近い .....47%
- ※ 設備が豊富で整っている .....29%

【スライド 24】

4分の3以上の方がペットも入居出来るかどうかが一番大切な判断要因だと答えています。インタビューした70%の人がどんなことがあってもペットを手放さないと断言しています。犬を飼っている81%の人がペットとは離れないと言っています。38%の人がケアやハウジング提供者でペットを許可してくれるところを知らないと言っています。

アンカーのチーフエグゼクティブである、ジョン・ベルチャーはこう語ります。【スライド 25】



「この問題が深刻に捕らえられない限り、ペットのいる高齢者は必要としている住居から拒否されるか、大切なコンパニオンを失うかという選択に苦しめられ続ける。そろそろこの現実をしっかりと受け止め、苦しみを終わらせるときではないか。」

John Belcher  
ジョン・ベルチャー

【スライド 25】

重要なポイント：ケアやハウジング提供者は高齢者にペットが与える感情面での重要性やセラピー効果を認め、政策を見直すべきである。

住宅提供者によってペットに対する姿勢がまちまちなのは、許せないことです。英国では町によってはペットを許可してくれるシェルターが一軒もないところがあるかと思えば、他の町では積極的なペット政策が当たり前

なっているところもあるのです。

またハウジング提供者によっては、目を瞑るという方針をとっているところもあります。つまり規則上はだめでも管理者が口頭で許しているところもあるのです。このような状況でペットを飼うことになって、管理者が変わった途端にペットを処分するよう言い渡されるというようなことも珍しい話ではありません。

このような話は、現在もイングランド南部のポーツマスという町にあり、今だ未解決です。ここの地元の行政は「目を瞑る」政策を長年に渡りとってきましたが、最近になってノーペット政策を強化することにしたのです。沢山の人が、特に高齢者が大変悲惨なストレスを経験しています。あるお年寄りの男性はこのようなストレスに我慢できずに愛する猫を安楽死させました。SCASと動物福祉団体が行政に手紙を書きました。行政は証明を揃えるために小委員会を設立し、そのペット政策は今は見直されています。SCASは、ペットの与える健康そして社会性への利益の証明を提出し、有効なペット政策をどのように実施したらよいかをアドバイスしました。今、私たちはその結果を待っています。

もう一つ、今度はウェールズの話です。あるハウジング提供者は積極的なペット政策を持っていました。しかし、今、政策の変更の通知がペットオーナーたちに渡されました。今飼っているペットは置いておけるが、今後ペットを飼ってはいけないというのです。高齢者を代表してある組織団体がそのハウジング提供者に、政策の変更に対し抗議し、ウェールズ政府にこの件を持ち込んでいます。



【スライド 26】

#### ロンドン 【スライド 26】

ロンドンの区の中でも大きいものの一つであるワンズワースも、政策を変更しました。しかしここはノーペット政策からペット許可政策に転換したのです。2000年まではペットを禁止していました。しかし入居者の多くがこの規則を無視し、ペットを飼って、それに関連する問題も発生しました。ワンズワースは前向きなペット政策を導入することとし、入居者にはペットを飼うにあたってのガイドライン規則に従ってもらうこととしました。この規

則はペットを飼っている入居者が作りました。この政策はとてうまく機能し、最高25階建てを含む集合住宅を含む全ての住居に適用されています。シェルターの入居者も全てペットが許されることとなりました。ハウジングオフィサーも、この新しい方針がうまく機能していて、入居者は生活の質と環境の改善を経験していると報告しています。

ペットを考慮した環境作りは、私の知る限りではイングランドではありません。しかし、ここに来て、神戸の環境デザイナーやプランナーはそのことを真剣に考えて下さっているようで、メアリーも私も大変感激いたしました。

### ペットオーナー（飼い主）委員会

- ※アメリカでは一般的
- ※マネージメント（経営側）と合意したペットのルール
- ※高い基準のペット管理（世話の状態）
- ※ペットのいない入居者たちの権利の保護
- ※委員会は新しい入居者にアドバイスしたり、監督し、必要に応じて注意したりする。
- ※ルールを守らない飼い主をマネージメントに報告する。

【スライド 27】

SCASでは、ペットオーナー委員会【スライド 27】の設立を奨励しています。この方法はアメリカでも大変人気を得ています。この委員会は、管理者側と一緒にペットを飼う規則を作り、そのことでペット飼育のスタンダードや動物福祉が守られることを保障し、ペットを飼わない人たちの権利も守れるようにするのです。委員会は、新しい入居者にペットに関する規則を教え、オーナーたちを監督し、必要に応じて注意をします。規則に従わないペットオーナーは住宅管理者に報告されます。

（昨日訪問した）神戸の集合住宅でのペットオーナー（飼い主）委員会について、もっと深く知りたいと思いました。



## Pets in Housing Coalition

ペット イン ハウジング連合

**ペットと住居 - より前進するために**  
住居提供者とテナント（入居者）のためのガイドライン

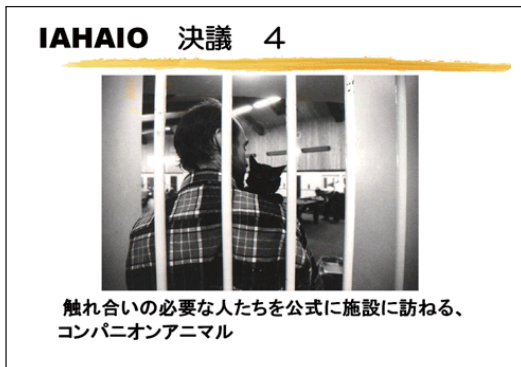
メンバー：動物福祉団体、介助動物チャリティー団体、犬管理団体、住宅提供者、議員、SCAS、大学

【スライド 28】

SCASはパスウェイ (Pathway) 【スライド 28】という、英国ペット住宅連合団体の創立メンバーであります。これはペットと住宅問題に関連する団体を一くりにまとめたものです。連合のメンバーには、動物福祉団体、獣医、老人の権利を主張、推進する団体などがあります。パー



【スライド 29】



【スライド 30】

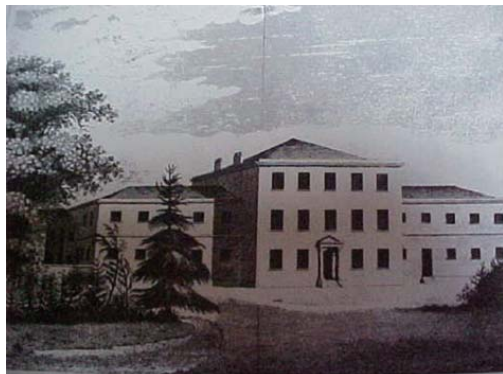
スウェイは入居者へのガイドライン、そして家主向けのガイドラインも製作しています。これらのガイドラインは、良い効果を生んでいます。

決議2. 【スライド 29】 ペットと飼い主のために環境を設計する英国でこのような取り組みは見当たりません。

決議4. 【スライド 30】 病院、老人ホーム、その他触れ合いを必要とする全ての年齢の人たちの施設への、管理されたコンパニオンアニマルの出入りを認知させる。

### 歴史的背景

コンパニオンアニマル（コンパニオンアニマル）のセラピー効果はすでに古代に認められていました。古代ギリシャ人はヒーリングの寺院に犬を置いていました。犬になめさせることで治療効果があると信じられていました。うつに悩むギリシャ人には乗馬をするようにとアドバイスしていました。英国でも施設における動物には大変興味深い歴史があります。現代社会には、初めて施設に計画的にAATプログラムを導入したのは英国で



【スライド 31】

あると言えるでしょう。

### ヨーク静養所

ヨーク静養所【スライド 31】はイングランドにある、進歩的な精神病施設です。18世紀に、それまでの精神病介護に対して挑戦するために建てられたものです。その当時の精神病の治療は隠密に行われ、鎖でつないだり、わらの上に寝かせたり、食事を与えなかったりなどの患者に対するものもありました。ヨーク静養所では多くの人道的な扱いや斬新なアイデアが導入されました。患者は大切に看護されました。暖かな部屋で、きっちと服を着せられ、栄養の行き届いた食事が与えられ、一人一人個々の人間として扱われました。治療メニューの一端としてコンパニオンアニマルや鳥が導入されました。そのことが次のように報告されています。【スライド 32】

**「動物たちは一般的に患者さんをよく理解しています。動物たちはただ楽しさを与えてくれるだけでなく、関わり、触れ合う中で、時として患者さんの社交性や善意の心を呼び起こすこともあると言われています。」**

**Samuel Tuke  
サミュエル・トゥーク**

【スライド 32】

この静養所は、模範のプログラムとされ、健康に従事する人たちは事前の予約なしでここを見学することを奨励され、また施設内は制限なしにどこでも見ることができました。他の施設のマネージャー（管理・運営側）がインターンとしてここに滞在することもできました。この静養所は英国国内だけでなくヨーロッパやアメリカまで影響しました。ウィリアム・エリス卿はこの方針の共感者で、頻りにここを訪れていました。彼はそこで患者にやりがいのある仕事やひまつぶしを与えることの重要性を確信しました。彼がその後、作業療法の成立者となりました。

40年ほど前まで、農園や庭園プログラムが英国の精神病院でよくあるものでした。マネージャーたちはその頃、家畜や鶏を飼育したり、野菜を育てることに、経済的な疑問を抱いていました。お店で買ったほうが安いからです。また社会福祉関係者は、農業労働者より安い賃金で患者が働いていることが問題であると主張しました。そして家畜は売られ、建物や温室は放置され、土地は住宅開発に売却されました。このことについて、誰かが患者さんの意思を尋ねたというのを、私は聞いたことがありません。

ヒューマンアニマルボンドおよびその治療的適用の研究が正式に始まったところで、このような事態になったのはとても皮肉なことです。それでは、現在の英国の

施設の状況を見てみましょう。

ここ20年の間に私は英国の様々な施設を訪問しました。施設は大体、メンテしやすいように設計されていて、そしてそれは必ずしも、人間にとって一番適切な環境を提供することにつながりません。しかしそこに動物や植物を導入することで、環境を豊かにし、様々な、時に予想もしないような利点をもたらしてくれます。それらは次のようなものです。

#### 施設に与える動物の効果

- コミュニケーションが改善される。
- 入居者間および入居者とスタッフ間の人間関係が改善される。
- 他人および自身への暴力が減る。
- 自発性や笑いが導入される。
- 環境が正常化する。
- 入居者とスタッフのストレスが減る。
- スタッフの異動（退職）が減る。
- ビジターが増える。

特に高齢者施設への利点として、回想セラピーの機会になったり、死ぬことへの問題解決への支えになったりします。

また動物の存在が、アルツハイマー病を含む痴呆のある人たちに良いということもわかってきました。患者は動物と接すると、数分間は意味のある会話を交わせるのです。オーストラリアの研究によると、動物がいると病棟のサウンド（音）レベルが下がるということです。

英国の健康やソーシャルケアの専門家は、入居者の動物とのインターアクションの価値を認め始めています。多くの長期滞在型施設では、動物が一匹またはそれ以上飼われています。訪問動物の来る施設もありますし、大半は飼っている動物、訪問動物両方が導入されています。大きな施設で、土地がふんだんにあるようなところでは、農園や庭園プログラムが再開されています。施設によっては野生生物を使ったプログラムを実施しているところもあります。例えば野鳥にえさを与えるなどです。SCASでは、植栽や滞在もしくは訪問ペットの情報を提供しています。

#### 精神病施設

いろいろな精神病施設では、動物の導入が始まっています。スコットランドの州立病院、法医病院ではウサギ、モルモット、鳥、魚などを飼って動物や園芸のセラピープログラムを幅広く実施しています。入院患者さんの半分がこのようなプログラムに関わっています。また興味関心のあるところとネットワークを構築しようとしています。そしてヨーク静養所のようにAATを導入した介護という新しいアプローチを持って広く影響していけるように

と願っています。

#### 病院

長期滞在型のところでは、高齢者が定期的にセラピードッグの訪問を受けるというのが、今日ではかなり実施されています。

スコットランドの調査では77%もの病院で動物を飼っているまたは訪問を受けています。しかしセラピー（治療）の一部として動物を使っているところは50%だけでした。

重症のケア施設で動物の姿を見ることはあまりありません。しかしランカスター ロイヤル病院では、高齢の患者のペットとのコンタクトを保つ必要性を認識しており、作業療法士が患者さんのペット訪問をさせるプログラムを導入しました。

ロンドンでは、2つの有名な病院；グレイト オーモンド ストリート病院とガイズ病院が重症の子どもたちにプログラムを導入しました。免疫不全の子どもたちにでさえ、セラピードッグ、ウサギ、モルモットなどの訪問を許しています。これらのプログラムは導入されてから何年も経ちますが、特に問題は発生していないようです。

#### スコットランド

先に紹介した1982年のスコットランドの調査では、71%の公立の介護施設、55%の民間の介護施設でペットが存在していました。そして公立施設の67%、民間施設では55%で、ペットのセラピー効果が認められていました。

この調査が示していることは、動物のセラピー効果について、介護のスタッフをもっと教育しなければならないということです。

#### ウェールズ

エイジ コンサーンという高齢者のためのチャリティー組織が、1999年にウェールズの介護施設におけるペットキーピングについての調査を依頼しました。この報告によりますと、ペットに関するいかなる事柄について正式な方針を持っているところはわずかであるということでした。22ある地方行政のうち、よく検討された政策を持っているところは2つだけでした。57%の老人ホームがア

#### ウェールズでの研究の結論



“明確なポリシーがないのは残念なことであり、至急、その状態を改善する必要があることを提示している。”

Fisk  
フィスク

【スライド 33】

アンケートには文書化した方針があると回答したものの、提出できたところは一つもありませんでした。75%が新規の入居者はペット同伴を許可すると言いました。ペットを飼うことの主な利点には次のようなものがあります。

- 会話が弾む。
- 心を落ち着かせる効果がある。
- コンパニオンシップ
- 入居者に何かすることを与える。

研究者はこのように締めくくっています。【スライド 33】



【スライド 34】

イングランド【スライド 34】

2001年、メアリー・ワイアム氏(SCAS 前会長)と私は我々の地域、北イングランドにおける、高齢者への動物とのインターアクションの提供状況を調査するプロジェクトを計画しました。

アンケートは無作為に選出された100の介護ホームや老人ホームに送られました。また高齢者、スタッフやAAまたはAATの経験のある精神衛生の専門家たちにインタビューを行いました。

主な結果は次の通りです。【スライド 35】

**イングランド北西部での研究**

- ※ 53% の家庭で共同のペットがいる。
- ※ 41% で文書になった規則がある。
- ※ 22% で個人のペットを許可している。
- ※ 12% が認定されているセラピー動物の訪問を受けている。
- ※ 22% がペットロス(ペットが死亡すること)のカウンセリングがあることを知っている。
- ※ 5% がペットを許可する別の住居リストに登録している。

【スライド 35】

この調査で、高齢者の動物とのコンパニオンシップの効力に関する知識にも姿勢にも、大変大きなばらつきがあることがわかりました。

英国では飼われている動物も訪問動物も、介護ホー

ムの方が老人ホームよりよく見受けれます。多くの介護ホームにはマスコットの動物や共同ペットがいます。これらの動物は、通常、マネージャーのペットであることが多いです。その種類も様々で、中でも猫、犬、鳥、魚などに人気があるようです。幾つかの老人ホームでもスタッフがペットを職場に連れてきているところがあります。このような動物がセラピー動物として認定されれば、それが最良なのです。スタッフの何人かは、マスコット動物の存在は、老人にとって入居するときあきらめなければならなかった自分のペットのロス(失うこと)への穴埋めになっているようだと思っています。しかしある研究者の言う通り、これは未亡人になったばかりで老人ホームに引っ越そうとしている人に、「大丈夫、ホームにも男性はいますよ。」と言っているようなものです。

#### 施設で飼っているペット

幾つかのホームでは自分のペットを連れて入居することを許可しています。

これが最善の方法で、ホームへの順応が一番スムーズで、変化へのショックが少ないのです。個人ペットを許可しているホームは、ペット動物たちはペットポリシーのないホームが想像していたよりはるかに簡単に環境になじみます。動物は通常、うまく順応し、ほとんど問題を起こしません。高齢者の連れてくるペットは、大体がその飼い主と長年生活してきたので世話や躾の経験も豊富で、おとなしく、行儀が良いです。またペットを飼い続けることを許されると、新しい入居者が来たときも受け入れやすいのです。

臨床心理士マックニコラスによる1993年の調査によると、介護ホームに入るためにペットを失った高齢者は大変な思いをし、その結果ホームでの新しい生活に順応することがとても難しくなるということです。このような元ペットオーナーたちは、失ったペットのことを口にすると、それが取るに足らないものになってしまうことを恐れて、あまり話をしなかつたりします。ホームのスタッフはそんな人たちが深い悲しみにいることを気づかず、ただ気難しく、短気で、やりにくい人たちだと思ってしまうことがあります。

悲しいことに、私たちもソーシャルワーカーも、お年寄りがホームに入るためにペットをギブアップさせ、安楽死の手配をしてしまうというケースを耳にします。そんなお年寄りがホームに入居してみると、他の人たちはペットを飼っているのです。ソーシャルワーカーの決定的な誤解で、ペットが不必要に処分されてしまったというケースです。

#### ホスピス

英国では、ホスピス運動がとても進み、末期症状や終末のケアに対して、全人的な捉え方をするようになってきました。サム・アーメッドザイ教授、シェフィールド大学、待期療法の教授は1992年、英国のホスピスに

## ホスピスにおける動物の研究

- 患者をリラックスさせる助けとなる。
- 患者と家族の気晴らし(気分転換)となる。
- コミュニケーションを助ける。
- 患者に動くことを奨励する。
- 痛みを含め、症状をコントロールする助けとなる。
- 環境を正常化する。

Ahmedzai and Biswas, 1992  
アーメドザイ&ビスワス 1992年

【スライド 36】

## 刑務所における動物



閉ざされた刑務所の中には、環境を豊かにしてくれるものがなく、収容者の心身に有害な影響を与える。

【スライド 37】

おけるペットについての調査研究を行いました。アンケートに回答した115あるホスピスのうち、89が独自のペットを飼っていました。一番人気のあったものは魚で、最も意外だったのは子羊でした。27のホスピスではPAT (Pets As Therapy) 訪問動物が通常毎週ホスピスを訪れていました。大半のところはコンパニオンアニマルの、主な精神的効力を述べていました。【スライド 36】  
**刑務所** 【スライド 37】

刑務所に留置される高齢者の数が増えています。「Growing Old」という最近出版された報告では、刑務所の高齢者についてこの様に述べています。【スライド 38】

## 刑務所で歳をとること

- ※ 80%以上が慢性疾患または障害を持っている。
- ※ 50%以上が恐らく収容生活が原因の精神病を患っている。
- ※ 多くが家族やコミュニティとの関わりを持っていない。
- ※ 刑務所生活でのストレスに負けやすい。

Howe 2003  
ハウ 2003年

【スライド 38】

大半の刑務所での環境の貧しさが、収容者に悪影響を及ぼし、それが精神疾患に結びつきます。しかし動物を導入することで、そんな環境を改善し、正常化することが出来るのです。

刑務所長や刑務所の役人そして受刑者たちは、私たちに刑務所での動物の存在が、施設環境の正常化に大変大きく貢献し、刑務所生活のネガティブな側面を補う役目をしてくれるとアドバイスしています。

獣医として私は、「収容(留置)生活」を計画する中で人間の基本的行動に必要なことに対していかに注意が払われていないかということに驚きます。これが施設で生活するということなのでしょう。人には「育てる」生きがいが必要なのです。しかし施設では、特に刑務所ではこのような機会がことごとく否定されています。

メアリー・ワイアムによる2つの全国調査によると、約25%の施設に動物プログラムがあります。しかしこれらもその長(トップ)のサポートのあるなしにかかっています。ですからプログラムは導入されたり、消えてしまったりします。そしてこのような状態は収容者には逆効果になることもあり、刑務所の円滑な運営にも影響を及ぼします。

## 治療としてのペット



【スライド 39】

## 訪問AAA・AATプログラム 【スライド 39】

現在、AAA/AAT訪問を許可するには、特に何の必要条件はありません。

PAT (Pets As Therapy) は認定されているセラピー動物(主に犬)の老人ホームやホスピスへの訪問を提供しているチャリティー組織です。動物たちは獣医と動物行動学者によってその健康状態、性格、行動をチェックされ、ワクチン、寄生虫の薬がちゃんと与えられているか確認されます。また動物は第三者への傷害保険に加入します。このプログラムは20年前に始まったのですが、現在4000匹以上の犬がセラピードッグとして認定され活動しています。さらにPAT猫、ウサギやオウムも若干います。これらの動物は、ボランティアのオーナーたちによって施設訪問に連れて行かれます。

## セラペット

同様のプログラムがスコットランドにあり、セラペットと呼ばれています。

両方とも健康やソーシャルケアの専門家からも高い評価を受けています。

大きな深刻な問題は、どちらのプログラムからもまだ報告されていません。

## 動物禁止の理由 【スライド 40】

ヒューマンアニマルボンドの経験や知識のないマネージャーは、独自の価値観や姿勢、偏見を持ち込みます。

## 動物を入れたくない理由

- ※感染、アレルギー、転倒
- ※衛生問題、音(声)
- ※仕事が増える
- ※全員がペットを欲しがら

【スライド 40】

人は変化を恐れ、未知のものを恐れます。そんな人たちが表す懸念には以下のようなものがあります。

### 1. 感染、アレルギー、転倒の恐れ

人は過剰に心配します。ペットのいるまたは訪問動物を受け持っているホームから問題のある報告はありません。

### 2. 衛生問題、音(声)の心配

ペットのいるホームからは、動物は入居者ほど施設を汚さないということです。騒音の問題も報告されていません。精神疾患のある入居者のいるホームでは、動物がいる方が落ち着きやすく、ノイズレベルが低くなるよさだということです。

### 3. (スタッフの)仕事が増える

不思議なことに、ペットがいる方が仕事量が減ります。動物が入居者の相手をしてくれるからです。動物の存在は入居者間の人間関係を良くし、コミュニケーションを改善します。ですからスタッフは、別の仕事に当てる時間が増えるのです。

### 4. 全員がペットを欲しがら

大抵25%の入居者がペットを欲しがります。大半が他の人とペットを共有することでハッピーです。ですから20床のホームではペットが3、4匹ということになります。

きちんとした計画、話し合いと運営で、リスク要因は最小限にすることができます。ペットの導入前に疑問視していたスタッフも、それは正当ではなかったと気づくのです。

このような動物についての誤解があるのは、現在ヒューマンアニマルボンドについての研修が、健康やソーシャルケアの専門家、そして住宅提供者に対して行われていないからなのです。

レオ・バスタード教授は著書「動物、年とる者、年とった者」の中でアニマルアシテッドセラピー(AAT)についてこのように言っています。【スライド 41】



“..この治療方法は比較的高くなく、リスクも少ない。  
今日使用されている大半の治療薬よりリスクが少ない。”

Bustard  
バスタード

【スライド 41】

## WHO

WHOはこのように明言しています。

「きちんと世話されているペットは、健康へのリスクを全くもたらさない。」

決議5【スライド 42】。患者さんに、障害による限界

## IAHAIO 決議 5



- ※アシスタント アニマル (介助動物)を公式に認めること。
- ※プログラムを開発すること。
- ※AATについて大学生の研修に取り入れること。

【スライド 42】

を超える助けとなれるよう特別にトレーニングされた動物を公式に有効な治療手段として認めること、このような動物を育てるためのプログラムの開発を促進すること、健康や社会福祉(ソーシャルサービス)の専門家育成の基本学習の中にこれらの動物の多岐にわたる能力についての教育を必ず入れること、などがあります。

アシスタントアニマル(介助動物)は英国では、高い位置づけにあり、一般的に共通して認められ、受け入れられています。時々、動物がレストランに入店するのを拒否されたというような話を聞きますが、このような場合、そのレストランはとてつもない批判を受けてニュースになります。英国では盲導犬、聴導犬、車椅子に付き添うサービスドッグ、てんかんアラート(警告)ドッグなどがいます。

これらのプログラムはチャリティーによって運営され、一般の人たちからの募金に頼っています。ある一つの地方自治体が最近、障害のある入居者の介助犬の管理に予算をつけることを取り決めました。

ランカシャー州とエセックス州にある精神衛生の医療チームが、先駆けてセラピードッグを、地域の精神疾患のある患者さんの治療に導入しました。エセックス州ソーシャルサービスにはスタッフとして2匹のセラピードッグがいます。精神疾患のある患者さんの訪問を行っています。患者さんたちは、セラピードッグの来てくれる今の方が、よく看護されていると感じています。患者さんたちもスタッフに対して、攻撃的な態度が少なくなり、マネージャーも、患者さんたちから入る電話も少なくなり、かかってくるときも荒々しさが少ないと報告しています。また犬がいることで、新スタッフのリクルートにも役立っています。エセックス州ソーシャルサービスは、進んでいて親切なところだと就職希望者に見られています。



## 高齢者についての研究

- ※ペットを許可するホームの不足
- ※ペットの世話への補助金の必要性
- ※ペットとの死別からの立ち直り問題
- ※休暇中(旅行中)のケア

高齢の飼い主には、もっと援助が必要である。

The Blue Cross  
ブルークロス

【スライド 43】

## コミュニティーを基盤にした高齢者のためのヒューマン アニマル サポート サービス (HASS)

### 高齢者とペットの調査

ブルークロスは、英国でも最も大きな動物福祉のチャリティー団体で、ここがペットのいる人246人、いない人128人を対象に高齢者とペットの調査を実施しました。

94%の人が人生の中のいずれかの時点でペットを飼っていました。この調査で、もっとペットサポートサービスを開発するニーズがあることがわかりました。

### ブルークロスの調査【スライド 43】

高齢者により発生するペットに関する問題

現在オーナーたちは以下のようなことについて懸念を抱いています。

- ペットを許可してくれる老人向けシェルターや住居の不足。
- 無料または補助金のある獣医サービスの提供へのニーズ。

元オーナーたちはこう述べています。

- ペットは「荷の重い拘束」である。そして「旅行中のペットの世話」も問題です。また何人かは「ペットの死」からずっと立ち直ることができず、悲しみを引きずっています。

この調査で、更なるペットにもやさしい住宅、そして高齢者オーナー（飼い主）へのサポートサービスの必要性が指摘されました。2002年に高齢者のフォーカスグループの実施した調査でも同様の結果が出されました。

英国のヒューマンアニマルサポートサービス (HASS) は政府からの補助なしに、チャリティーを設立、導入してきました。これには、ペットの養子縁組、ペットケアの援助、ペットロスの際のサポート、無料または補助のある獣医サービスの提供を行っています。

## EAC

高齢者住居カウンセラー (EAC) は、全国の登録されているシェルター住宅や老人ホームの情報を、ペットの許可あるなしに至るまで持っています。ペットを許可しない住宅のマネージャーは、ペットを受け入れるポリシーのある地元施設のリストを保持していなければなりません。

1993～4年に実施された調査によると、高齢者に住居を提供しているハウジング提供者のたった40%がペットを許可しています。

スコットランド ペット養育サービス (PFSS) 【スライド 44】

## スコットランドのペット里親サービス

- ※高齢者のための緊急里親サービス
- ※1985年設立
- ※スコットランド全土で300余の里親家族
- ※模写しやすい モデルプログラム



【スライド 44】

この革新的なプログラムは1985年にスコットランドで開始されました。高齢者の中には、ペットがいるために、入院や必要な治療を受けることを拒否している人がいるということが明らかになったのです。PFSSはこのような高齢者飼い主のニーズに応えるために設立されたのです。これは緊急ケアサービスであり、旅行に行く間の預かりサービスとは違います。

スコットランド中で300家族または個人がペットの世話や散歩役として登録されています。各地域でコーディネーターがいてプログラムを運営しています。これは他の地域にも応用出来るモデル（模範）プログラムです。PFSSもよこんでこのプログラムの情報を提供してくれます。

Who helps them all?  
The Cinnamon Trust

ザ シナモン トラスト

【スライド 45】

## シナモン財団【スライド 45】

シナモン財団とは、イングランドに拠点を置く高齢者または末期症状の高齢者のペットオーナーに、病気や死亡した後もペットの面倒を見るという保障を提供することでサポートしています。この財団はボランティアを通じて様々なサービスを高齢者に提供しています。

- ペットより先に亡くなってしまった場合、ペットの面倒を見ます。
- 飼い主が入院してしまった場合、代行して

- ペットの面倒を見ます。
- 毎日犬の散歩に行きます。
- ペットを獣医に連れて行きます。



【スライド 46】

**ペット死別問題  
支援サービス**

SCASとブルークロスにより開発

ペットが不治の病になった・死亡した・失踪した人たちに電話やEメールで個々の支援をする。

ペットを失うこと、死別することに関連する問題を理解するための研修を提供している。通信教育コースもある。

【スライド 47】

#### ペット死別サポートサービス【スライド 46, 47】

#### PBSS (Pet Bereavement Support Service)

PBSSはSCASとブルークロスが開発したもので、ペットが末期を迎えた、死亡した、またはいなくなった場合、電話やEメールで精神的サポートをします。またペットロスや悲しみを理解するトレーニングをします。今では通信教育が提供出来るようになりました。新たに、ペットロスを経験した子どもをどのようにサポートするかをリーフレットにまとめました。

#### ナショナル動物福祉チャリティー団体

チャリティー団体の幾つかは低収入の高齢者を助けるサービスを行っています。例えばブルークロス、RSPCA、SSPCA、PDSAなどは低所得者対象の住宅手当を支給されている人たちを含む低収入の高齢者に獣医クリニックサービスを提供しています。このクリニックサービスは、主に都市部で行われており、田舎の町の人たちまでは利用しにくいものと思われます。

ヒューマンアニマルボンドの十二分な調査にも関わらず、そしてこのボンドが人間の健康や生活の質を向上させるのに限らない可能性を持っているにも関わらず、この科目は今だ英国の健康やソーシャルケアの専門家を育てる大学のカリキュラムに入れられていません。ですから、コンパニオンアニマルに関する現在の実施状

#### 課題への挑戦



【スライド 48】

#### 課題への挑戦

- ※他の団体との協力
  - ☑CAWC
  - ☑Pathway (パースウェイ)
- ※専門家向け本の出版
- ※リサーチ
- ※大学生・大学院生の研修

【スライド 49】

況には、科学的知識が反映されていないのです。【スライド 48,49】

SCASの設立当時、我々の主な存在理由はリサーチでした。今もリサーチを奨励し、資金援助していますが、ヒューマンアニマルボンドへの人々の意識を高めるために、教育とトレーニングが、同じくらい大切な活動になってきています。プラクティショナー（獣医・実践者）のサポートもまた大切な要因で、モデルプログラムを企画し、実施するにはどうしたらいいのかを学ぶために入会するプラクティショナーが増えています。SCASはトレーニングのコースを実施したり、会議を主催したり、専門家の講師を手配したり、年に四回ジャーナルを発行したり、その他ヒューマンアニマルボンドに関する出版物を製作しています。SCASは高齢者とコンパニオンアニマルの問題に人々の関心を高めるために努力しています。ペットキーピングに関するポリシー（方針）も見直し、改正していく必要があります。

我々には関係のある職種の人たちや住宅提供者を教育し、政府には適切な法令を制定するよう働きかけていかねばなりません。

これらの問題は地球規模のもので、国際的な視野で調査、モデルプログラム、トレーニングコース、キャンペーンの素材、出版物などの情報を交換し合っていく必要があります。

SCASは、高齢者の権利のために働いているチャリティー団体を含む、ペットと高齢者問題に関心のある他のグループと協力体制をとっています。

## CAWCとの共同研究

SCASはコンパニオンアニマル福祉カウンシル (CAWC) と共同で、健康およびソーシャルケアの施設におけるコンパニオンアニマルにまつわる課題を取り上げていっています。

施設における動物の問題に対して、私たちはより良い方法で臨む必要があります。幾つかの組織には、良く構成されたヒューマンアニマルボンドのプログラムがあり、きちんと文書化された決め事にしたがって運営されています。他はもっと手抜きであったり、行き当たりばったりであったり、時には人間または動物が妥協しなければならないようなものもあります。幾つかの施設では、何の正当な理由もなく動物を禁止しています。私たちは特に長期入居者で、動物とのコンパニオンシップを禁止された、またはボンド関係を必要もなく裂かれた人たちが心配です。

データ収集の依頼を英国内の施設や組織、そして海外のヒューマンアニマルボンドの組織団体に出しています。施設における動物の選択、そしてケアの仕方の基準、そしてプログラムに関わるスタッフやボランティアのトレーニングの基準を導入しようと私たちは計画しています。

ペットと高齢者についての出版物もまもなく出ます。これは高齢者のために働いている人たち、健康やソーシャルケアの専門家、住宅提供者へのガイドです。

ペットと高齢者に関する様々なリサーチプロジェクトも進行中です。これらにはペットを歓迎するシェルター住宅と禁止しているところの比較調査もあります。

また高齢者がペットをを飼う、飼わないの判断をするのにどのような要因が影響しているのかも調べています。

高齢者の意見を直接集めることに焦点をあてるグループもあります。

パースウエイとの共同作業も継続しています。

またSCASのメンバーは、ヒューマンアニマルボンドを大学・大学院のコースとして開発することに関わっています。最初の園芸セラピーおよびアニマルアシステッドセラピーの基礎課程コースがメイヤーズコフ大学で始まっています。

## 第10回国際 IAHAIO 会議【スライド 50】

IAHAIO(The International Association of Human-Animal Interaction Organizations)

2004年10月、SCASは第10回国際 IAHAIO 会議をグラスゴーで開催します。この会議は、ヒューマンアニマルボンドへの理解を深めるためにこれまでに例のないような機会となり、プログラムの導入を広く奨励する



【スライド 50】

## グラスゴー2004：特別セッション

※都市のペット

※コンパニオンアニマル法

【スライド 51】

機会を提供してくれるでしょう。特別セッション【スライド 51】の一つでは、コンパニオンアニマルを持つことに関する法律について検証します。それには、入居規則や施設入居者の動物に触れ合う権利についても含まれます。また我々のフランスの姉妹団体である、AFIRACのスポンサーによる「都市のペット」というタイトルのセミナーも開催されます。このセミナーでは、どのように都市環境にペットが溶け込んでいるのかを検証します。課題、斬新なポリシー、入居規則、動物管理者育成トレーニング、学校動物、野生動物の管理などについて討論する機会もあります。これらのセミナーの問い合わせ先もお知らせしましょう。

日本からぜひこの国際会議に参加して頂きたいと思います。学ぶこと、意見交換することが沢山あります。私たちは都市環境の中におけるペットについて日本から学ぶべきことがあります。

ここに、海外の状況の中から、私たちの将来に明るい希望を与えてくれるものについてスライドで紹介します。

## フランス【スライド 52】

フランスでは国の法律で、ペットを持つ権利が人権として常に守られています。

## 各国の状況

### フランス：

※ペットを飼う権利が国の法律で守られている。

※老人ホームのスタッフ用のAAT 研修プログラムが開発されている。

【スライド 52】

### アメリカ :

- ※シェルター住居の入居者がペットを飼うことは、連邦の住居でのペット法で、その権利が認められている。
- ※シェルター住居にペットを入れることは、人々の連帯感を強め、生活の質を向上させる。マネージャー(管理人)はその効果に前向きで、予測されていたような問題も発生しなかった。
- ※アメリカでは家主が数ヶ月間ペットについて、見て見ぬふりをしていると必然的に規則の「ペットお断り」の項目は無効になる。

【スライド 53】

### アメリカ :

- ※動物シェルターによっては、特別に高齢者向けの養子縁組プログラムが用意されている。
- ※サンフランシスコのSPCAでは、シニア向けの幅広いコミュニティーアウトリーチプログラムを提供している。
- ※老人ホーム向けエデンプロジェクトがある。
- ※ミネソタ大学公衆衛生専門家の調査によると、施設でのペットへの恐怖には根拠がない。

【スライド 54】

また私たちの姉妹団体である AFIRAC は、都市生活とペットについて深い知識と経験を持っています。

### アメリカ【スライド 53,54】

アメリカでは、住宅におけるペットに関する1983年に制定された連邦の法律が、シェルター住宅の高齢者および障害者に、ペットを持つ権利を与えました。

UCデイヴィスによる長期の調査では、シェルター住宅にペットを許可したことで、コミュニティー意識が生まれ、生活の質が改善されたということです。住宅管理者(マネージャー)はこの効果に前向きで、心配していたような問題は発生しませんでした。

アメリカの住宅管理者の中には、ペットがもたらす効果に対して大変情熱的で、入居者がドッグシェルターからペットを貰い受けることを奨励している人もいます。

アメリカでは、家主が数ヶ月にわたりペットを黙認していると、ペット禁止規則は無効扱いとなります。

幾つかの動物シェルターは、高齢者がペットを飼うことに、引渡し料金を無料にすることで援助しています。サンフランシスコのSPCAは、コミュニティーに住んでいるペットオーナーたちを援助する、幅広いヒューマンアニマルサポートサービスを提供しています。そして施設にいる高齢者たちに、AAA/AAT訪問を行っています。

### ミネソタの調査【スライド 55】

ミネソタ大学、公衆衛生の専門家の調査の結果、ペットセラピーのプログラムを導入している284の老人ホームでは、けがや感染、アレルギー反応がかなり少ないことがわかりました。ペット関連の事故は、ペットへの露出時間100万時間に1件しか発生していません。それに比

### ミネソタ公衆衛生調査

- ※この調査はペットのいる284の老人ホームを対象に行われた。
- ※ペットに関わる事件は100万時間に1件の割合で発生した。
- ※同じ時間内に、ペットに関係ない事件は200件発生した。
- ※老人ホームで発生する事件1000件ごとに換算すると、4.5件がペット関係で995.5件がペットには無関係であった。

【スライド 55】

べてペットに関係ない事故は、100万時間に200~1137件もありました。老人ホームで起こる時間を1000とすると、4.5がペットに関係あり、995.5がペットとは無関係となります。

アメリカの老人ホームの医長、ウィリアム・トーマス氏【スライド 56】は、老人ホーム入居者がしばしば否定さ

### The Eden Alternative

#### ザ エデン オーターネティブ

- ※老人ホームには、コンパニオンシップ、育てる体験、生活の中のバラエティーがない。
- ※植物や動物で豊かになった環境の中で得た成果には、入居者の死亡率の低下、精神障害に対する処方薬の減少、健康状態の改善、スタッフの異動の減少、予算節約などがある。

William Thomas MD  
医師 ウィリアム・トーマス

【スライド 56】

れる三つの基本ニーズをまとめました。それらは、コンパニオンシップ、何かを育てる機会、そしてバラエティーです。これらのニーズに応えるため、彼は豊富で多様な環境を用意し、様々な種類の動物、鳥、室内そして庭園の植物、そして訪問する子ども対象の活動などを組み入れました。彼の著書、「Eden Alternative」(エデンの園の代替案)の中で彼は、入居者の死亡率の低下、向精神薬の処方薬の減少、健康状態の向上、スタッフの異動、退職の減少、予算の節約など、効果の利点を記録しています。

彼の教えに従ったマネージャーの中には、施設を「エデン化」する手段をとったところもあります。

### イタリア【スライド 57】

イタリアでは最近になって政府が、飼い主のいない、または望まれない動物の安楽死を禁止する条例を出しました。このことで地方や中央政府が動物福祉に関する問題に目を向けるようになりました。ヒューマンアニマルボンドを支援する積極的な取り組みが始まっています。その中の一つにドギー(犬)ケアセンターがあり、とても人気があります。そして失業中の人たちをトレーニングして、高齢、または障害のあるペットオーナーたちに、犬の散歩をしたり、ペットを獣医に連れて行った

### イタリア :

※政府が飼い主のいない、捨てられた動物の安楽死を禁止した。

※地方自治体や中央政府は、積極的に人と動物の関係および動物福祉に取り組んでいる。

凶ドギー ディー ケアセンター- 大変好評

凶年配ペットオーナーへのサポートサービス  
- 犬の散歩

凶獣医への訪問、ドッグフードの配達

既存の高齢者のためのサポートサービスの延長

【スライド 57】

り、ペットフードを買いに行ったりするサービスを提供するというようなことも行われています。

香港では、(SARS騒動のとき) ペットオーナーたちに対して立ち退き命令が出されましたが、大きな集会デモのお陰で廃止になり、効果的でした。このことに、私はとても元氣付けられました。

ドイツとイタリアでは、ペットを飼っている人は、飼っていない人より責任感が強く、反社会的になる傾向が少なく、薬物などに手を染めることが少ないという研究結果が報告されています。

犯罪者(違反者)に対する動物を導入したりハビリ(アニマル アシステッド セラピー: AAT) が効果的であることはスペインとアメリカで立証されています。

英国でもヒューマンアニマルボンドについて様々な観点から取り組んでいます。

ペットと高齢者の問題は非常に重要で、今日皆さんがこの問題に着目して下さったことに感謝しています。

話をまとめましょう。ペット関連の問題を少なくするためにペットを禁止する住宅では、もっと深刻な問題が発生することになっています。禁止することでペット問題がなくなるわけではないのです。それに禁止にしてもペットを飼う人は必ずいるものです。そしてそのような状態でペットの規則もない中で飼うことで、住居者の間でペット関連の問題はより起こりやすくなる可能性があります。「育てたい」という気持ちはとても強く、動物を飼わざるを得ない人もいて、そんな人が野生動物を部屋の中で飼うかもしれません。動物との接触がないと、心臓病や循環器疾患の後の生存率が下がるなど、人間の肉体的、精神的健康が損なわれるのです。

また一方、集合住宅、コミュニティーや施設にペットを入れることで、コミュニティー意識を高め、環境をより良く、豊かにします。そしてコミュニティー意識が入居者やマナージャー、全ての人々の生活の質を改善します。ペットポリシー(規則)が導入される前には、ペットのいない人々から騒音や迷惑問題への懸念の声が上がっていました。問題を最小限にし、成功を最大限にするには、注意深い計画が全てです。そのためには、

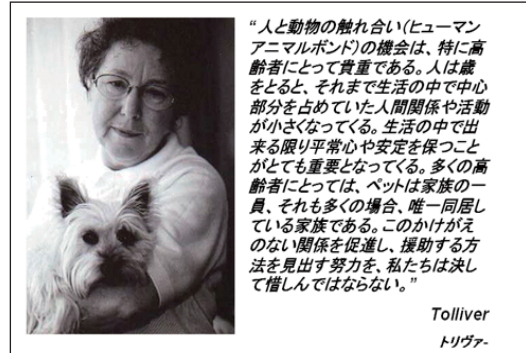
現行の企画を見直すことがあります。十分検討されたポリシーが必要で、平等に実施されなければなりません。人々に知識を与え(教育をして) ペットオーナーズ(飼い主) 委員会も検討されなければなりません。その他の戦略としては、犬のトレーニングクラブなどを通じて一般の人々を教育することです。

私たちは昨日、兵庫県動物愛護センターという素晴らしい施設を見学させて頂きました。このような進歩的な革新的なアイデアを持った皆さんの街におめでとくと申し上げたいです。

学校訪問は、子どもたちに動物の管理の仕方の他、動物そのものや動物愛護について教えるのに大切な機会です。

入居者にペットに関する情報案内一式を配布したりもします。

動物管理者も教育される必要があります。動物管理に加えて、ヒューマンアニマルボンド、についての教育が大切です。ペットを考慮した都市環境づくりもとても大切です。運動をさせるスペースの確保、そして犬の糞用ゴミ箱は、定期的にゴミが回収されなければなりません。最近ヒューマンアニマルボンドおよびその健康や社会性への効果への理解が深まりつつあり、このことがペットや住居への新しく進化したアプローチを必要としています。健康や社会面への良い影響は計り知れず、それは全ての人たちの生活の質を高めることにつながります。最後に私の話を、アメリカの高齢化対策委員会のコミッショナーである、トリヴァー博士の言葉【スライド 58】で締めくくりたいと思います。



【スライド 58】

「人と動物の触れ合い(ヒューマンアニマルボンド)の機会、特に高齢者にとって貴重である。人は歳をとると、それまで生活の中で中心部分を占めていた人間関係や活動が小さくなっていく。生活の中で出来る限り平常心や安定を保つことがとても重要となってくる。多くの高齢者にとっては、ペットは家族の一員、それも多くの場合、唯一同居している家族である。このかけがえのない関係を促進し、援助する方法を見出す努力を、私たちは決して惜しんではならない。」

ペットと高齢者は、私たちにとって最も大切な課題です。皆さんご清聴有り難うございました。

どうぞみなさん、グラスゴーにいらしてください。

人と動物：時間を越えた関係  
The 2004 IAHAIO Conference on Human Animal Interactions

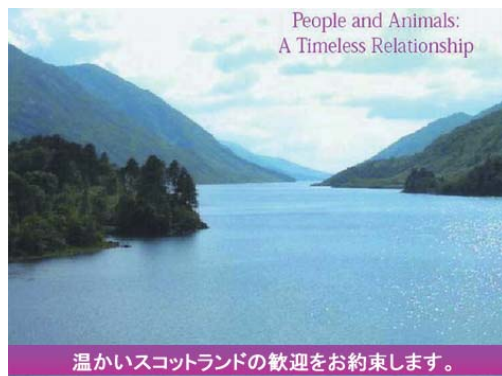
※入稿のお知らせを発送したところです。

※セミナー、ワークショップ、特別セッション、ポスター

※知識を交換し、経験を語り合う機会です。

www.glasgow2004ad.com

【スライド 59】



【スライド 60】

この IAHAIO の国際会議は3年に一度開かれています。ネットワークの機会としても素晴らしいですし、ヒューマンアニマルボンドの新しい報告などもあることを期待しています。どうぞぜひ、一度この会議に参加されますことをお勧めします。【スライド 59,60】

私は1986年、ボストンでの会議に思い切って投資をして参加しました。私にとって初めてのヒューマンアニマルボンドの会議でした。それが私の人生を変えました。

Elizabeth Ormerod

### 山崎

オームロッド先生、どうも有り難うございました。

1986年のボストンで人生が変わったとおっしゃいましたが、私も1989年のモナコで人生が変わりましたが、皆さんやはり国際会議の場に出て頂きたいと思います。時間も押してまいりましたので、私のほうから長々しくお話しするつもりはございませんが、幾つかポイントを皆様に、再度先生のお話の中で是非覚えて頂きたいことを申し上げたいと思います。最後におっしゃったケアフルプランニング [Careful Planning]、つまり非常に注意深く計画を立てて参加者の教育をしない限りは、先生がおっしゃった様々なプログラムは出来ないということ、つまり良いことだからといって突然飛び込む施設など沢山ありますが、それに対する警告だと思います。

もう一つは学際的インターディシプリナリー [Interdisciplinary] という言葉が最初に出ましたけれど、学際的ということは様々な専門家がその分をわきまえながら専門知識を提供するというので、昨今動物関係者が、自分が人間のセラピーをするような声を上げ

ている方々もおられるようですが、それはまったく間違いであって、動物関係者は動物の専門家として動物を提供するけれども、あくまでも人間側の施設運営や人間の治療や生活設計をするのはその分野の教育を受けてきた人間であると、その人たちと動物の専門家が一緒になると彼女がおっしゃったシナジズム [Synergism] 相乗効果、 $1 + 1 = 2$ ではなく $1 + 1 = 4$ になるということになる、そのことを覚えておいて下さい。もう一つは、動物福祉という言葉も先生は早いうちにおっしゃいましたが、どのようなご老人にとって飼いつけて欲しいという状況であっても、それからどのように施設に動物を入れたいという状況であっても、動物の福祉が犠牲になることは絶対にやってはいけないと、これは根本的な原則です。それに加えて最後の方におっしゃったエデンオールターナティブという、これは私はエデンの園の代替作という風に自分では訳しておりますが、これは以前ハーバード大学のイー・オー・ウィルソンという方がバイオフィリア論といって出したものにベースをおいております。これは動物や植物を施設の中に入れるという、簡単に言えばそういうことなのですが、アメリカでは実は一人歩きをしまして、ケアフルプランニング無しに動物などを施設の中に入れて大変大きな問題を起こしてしまった施設もありますから、日本でも実は老健や精神科の病院などで咬傷事故が起こったという間にまぎれて影の方に押しやられている事故というのが沢山あります。そのあたりを皆様方お忘れにならないで頂きたいと思います。もう一つはソーシャルサポートと先生がおっしゃったご老人にとっての社会的な支援、これは特に人間の医学や厚生労働省関係の方々覚えておいて頂きたいのは、支援というのは本当に人間の健康を維持する為に重要であるということです。これもアメリカではカーネギーメロン大学などでソーシャルサポート・友人関係などが充実している人の方が、風邪のウィルスを実際に鼻に入れたときに引きにくいと、実際の人体実験をしているんですね。ですからソーシャルサポートがいかに大切かという話から、その一環として動物も同じ役割を持っているのだということで、決して動物をB級課題として扱って頂かないように是非お願いしたいと思います。あと最後に、学生さんやメディア関係の方などもおられるかと思いますが、多くの方々は日本では何も勉強出来ないということをお題目のように唱えられるのですが、残念なこと出来るのですね。英国のマニュアルは日本語ではございませんが、アメリカではやはり同じ様なビッグ4の一つで研究をしているデルタ協会の動物介在療法のボランティア教育マニュアルや動物を選別するためのマニュアル、施設評価等は全部日本語になっておりますし、私も個人的に(うちの学生も何人か来ていますけれど、)日本全国幾つかの学校で動物介在療法をコーディネーションするという学科を持って教えています。また精神科の病院でも、例えば群馬県立病院などでは、勿論メディアオプティミットなんですけれど、非常に素晴らしい動物介在療法のプログラムを持つ

ています。ですから日本に何も無いということではなくて、日本でも先進的なものを探してみても勉強しようと思えば出来る、海外が全てベストではなくて、海外の先生がおっしゃったような様々なプログラムと日本のものと比較研究し、どこを学べるかということを選択的に考えながら今日のようなお話をじっくり自分の身に付けて頂きたいと申し上げて、私のまとめとさせて頂きたいと思えます。

備酒伸彦



備酒でございます。まずオームロッド先生、素晴らしいスピーチを有り難うございました。さて私は今ご紹介頂きましたように理学療法士でございます。皆さん、ご存知でいらっしゃるリハビリ屋でございます。兵庫県の北部で仕事をしております。そういったところで、いわゆる障害のある高齢者や元気な高齢者もふくめまして介護予防という言葉が全国に行き渡っております、色々な高齢の皆様と一緒に仕事をしております。今日はそういった経験を通じて伴侶動物と高齢者の楽しい暮らしについて話をしていきたいと思っております。私、リハビリ屋でございますので皆様にテストをしたいと思っております。ご協力願います。ちょっと背伸びをしてもらえますか？背伸びをぐーっとして見て下さい。はい、楽になさって下さい。もう一回やりましょう。はい、ご協力有り難うございました。気持ちの良かった方、手を上げてもらえますか？はい、今手を上げられた方は普通の姿勢が悪い方です。ほぼ全滅状態でございますので、後ほど私のところにお出まし下さいませ。それでは本題に入ります。



【スライド 1】



【スライド 2】

これは私の自己紹介スライド【スライド 1,2】でございます。まず私専門でございますリハビリテーションとケア、お体に障害のある高齢者の部分からお話をしてみたいです。私が

理学療法士としてリハビリテーションに関わりましたのは今から 20 年前のことでございます。20 年前のリハビリテーションの環境といえますか医学の環境ですが、当時 40 人部屋というのがございました。40 人部屋というのが平気でありましたし、在宅ではもっと悲惨な家族によるお世話の光景があった時代でございます。高齢者のケアを取り巻く環境はこの 20 年で格段に良くなったということがそれから分かってまいります。

これちょっと、強烈な写真【スライド 3】で恐縮ですが、



【スライド 3】

少し時代を遡って高齢者ケアの現場をみますと、これ床ずれでございますが、床ずれに代表されるような悲惨な光景がほんの数年前まで当たり前のものとしてありました。家族のお世話の限界というのが実はこのあたりにあったのであります。それがゴールドプラン・新ゴールドプランといった制度・整備でありますとか、ましてや介護保険によりましてこのような褥創が極めて珍しいものになりました。このことは二つのことを物語っているように思います。一つは決して無くならないと思っていた床ずれなどを我々は克服出来たということです。不可能と思っていたことが可能になったということです。もう一つは象徴的な意味ですが、床ずれを克服した今、高齢者ケアに求められる目標はもっと高いものに移っているということでございます。

今や床ずれなど生物レベルのところではなくて、生



【スライド 4】



活のしかも楽しい暮らしの自立という人としてのレベルでのリハビリテーションやケアが求められているというわけでございます。【スライド4】

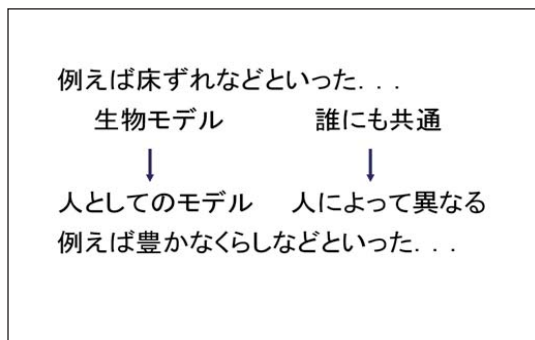
この写真【スライド5】をご覧くださいなのですが、こ



【スライド5】

の写真の真ん中におじいちゃんは多分20年前には庭先にいらっしゃらなかったと思うんですね。寝室の、もしかしたら湿った寝具の上に居たというのがごく普通の姿であったわけです。今の高齢者ケアではスタートの段階で既に庭先にいらっしゃることです。

こういったこと【スライド6】をまとめますと、今までの



【スライド6】

リハビリテーションやケアの大部分は例えば床ずれを治すとか、床ずれにならないようにするといった、所謂人を生物として捉えた誰にも共通のものであったということでございます。これからは人を人として捉えて、例えば豊かな暮らしなどという人によって様々に異なる取り組みを実現していかなければならないということに到っているということです。

人を生物としてではなくて、人として支援しようとする

**すなわち  
多様性のあるプログラムが必要**

① これは障害のある高齢者に対するリハビリテーションやケアに限ったものではない。

② 例えば、伴侶動物という、今まではあまり重く扱われなかったものが、重要な位置を占めるようになる。

【スライド7】

れば当然多様性のあるプログラム【スライド7】を求め

られるわけでございます。これは障害のある高齢者に対するリハビリテーションやケアに限ったものではありません。全ての高齢者に対する対応に当てはまることだし、そうなりますと例えば伴侶動物という今までではあまり重く扱われなかったものが極めて重要な位置を占めてくるということになるわけです。さてこの様に多様な価値観に対応していくことが求められるようになります。変わらぬのがサービスを提供する側の、即ち専門家と呼ばれる側の発想です。私自身も高齢者リハビリの専門家としての部類に入りますが、どうしてもこう自分勝手の思い込みの中で仕事をしています。ことに気が付きました。

これからはこの思い込みが起す失敗と思い込みから離れることによる成功を、この相反するものを伴侶動物のかかわりも織り交ぜながらお話をしていきたいと思

このように  
 これからの時代  
 人が豊かに暮らしていくために  
 自由な発想をもつことがとても大切...  
 なんですが

それを邪魔している“思い込み”

【スライド8】

失敗のほうは赤く書いてあります押し付けのサービス・低すぎる限界・沢山の決めつけというもの、成功のほうは右下で、窓ガラスの奇跡・牛小屋の奇跡・皆で話をするというタイトルでお話をしています。【スライド9】

**思い込みが産む失敗**

- ・押し付けのサービス
- ・低すぎる限界
- ・たくさんの決めつけ

思い込みから離れると

- ・窓ガラスの奇跡
- ・牛小屋の奇跡
- ・みんなで話をする

【スライド9】



【スライド10】

この写真【スライド 10】はこの方に頼まれて撮った写真です。カメラをぶら下げて特別養護老人ホームの中を歩いておられますとこの方が写真を撮って下さいとおっしゃったのです。承知しましたと何枚かお撮りしたんですけど、1枚もお笑いにならないのです。何か私気に障ることをしたのかなと思ってお話をしていると、問わず語りにこの方はこうおっしゃいました。ここでも写真はよく親切に撮ってもらうと、ただその度に『はい、笑って』『はい、チーズ』と言われると。私、世話になっている人に笑えと言われ笑ってきたけれども、一枚くらいまじめな顔の写真が欲しかったと。多分ここには高齢者や特養にかかわる方々は少ないかも知れないので、今の様に割にうけて頂いた反応なのですが、高齢者ケア系でこのような話をすると皆落ち込まれるんですよ。というのは、写真を撮るときに『はい、笑って』『はい、チーズ』なんて極めて常識的な言葉ですし、善意によるものだと思うのです。それであっても常識的で善意のあるものだからと言っても、常に投げつけられているとそれは時として相手を縛っていることになるのです。これは極めて怖いことでもありますね。

こういった時に我々サービスを提供する側に1つの技術があれば、単純な技術です。写真を撮って下さいと頼まれた時に『承知致しました。どのようにお撮り致しますしょう?』という聞く技術ですね。これを欠いてしまって始めからはい笑ってとやってしまうところに明らかな盲点があったわけでございます。ということを考えますと、伴侶動物の出会いという素晴らしい出来事もこの技術や態度を抜きにしては語れないものだろうと強く思います。

これはスウェーデンの北方民族博物館にある、あるコーナーの写真【スライド 11】です。ヘッドホンの左下

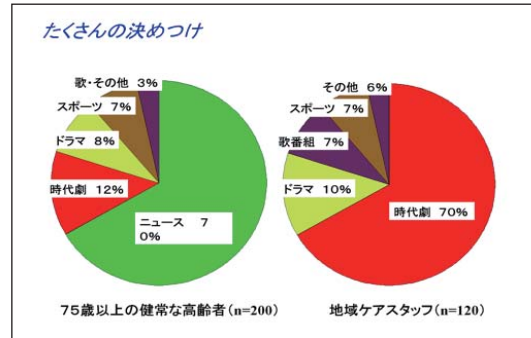


【スライド 11】

にございますヘッドホンマークに白と黒があるのをお気づきでしょうか。黒いほうは聴いてみますと盲(目)の方用のヘッドホンで、盲(目)の方へ向けた案内メッセージが用意されていました。私はこれを借りてみたのですが、絵の前まで来ますと下にレリーフが置いてあってヘッドホンがそれを触れとってきます。触りますとなんと絵の説明が始まるのです。王様の顔です、色はこんなですというように。少なくとも私の意識の中で盲(目)の方に絵を見て頂くという発想はございませんでした。ところがこの博物館はそれを当たり前に行っているの

です。これは人に対するサービスには、あるいは福祉、福祉とは幸せという意味ですが、福祉には決して限界というものがないのだ、もっとも人が幸せに暮らしていくための限界は高く目指すべきで、そういった意味で伴侶動物との関わりというのが一つの目印になるかもしれないと思います。オームロード先生のお話を聞いていて限界点の違いというのを河岸の比較で感じたわけでございます。

これは沢山の決め付けの一例【スライド 12】でござ



【スライド 12】

いまして、ケアスタッフに高齢者が好きなテレビ番組は何だと思えますかと聞きますと、70パーセントの方が時代劇と言うんですね。ところが本物に聞くとニュースと書いておられて。これほど現実と認識がずれてしまっているのは人の生活支援はおぼつかないわけでございます。伴侶動物に対する意識といったものも啓発の部分も含めながらやっぱり聞いていく必要があるだろうということです。

これも決め付けの一例【スライド 13】でございまして、



【スライド 13】

これは老人クラブの集まりでよく歩かなければならない地域なのですが、あまりにも履物がひどかったもので私の履いていたナイキの靴と保健士が履いていたニューバランスの靴を脱いで見てもらっているところです。非常に興味深くご覧になりまして、そして3ヵ月後に行ってみると、ここにナイキとニューバランスの靴が並んでいたんです。結局我々サービス提供側が、高齢者はナイキやニューバランスは買わないと勝手に決め付けて、もしかしたら情報を遮断していたのかも知れません。伴侶動物がこの様な情報の遮断によって遠いものになっているとしたら、とても怖いことだと思います。



【スライド 14】

これも決め付けの一例【スライド 14】でして、実は私の母なのですが、76歳で実家に行ってみますと彼女の部屋にこんな物が置いてありまして『これ何?』と聞いてみますと、『私、吉田拓郎さんが好きなよ』というわけでございます。戦中戦後、神戸で過ごしてきた母は所謂ジャズが流れる部屋でパッチワークをすることが何よりの楽しみなことでございます。ところが母と同じような年代の皆さんが使う日本にあるディサービスに、おたくにポップスやジャズのCDはありますかと電話をして聞いてみたところありませんでした。白樺並木にめだかが泳いでいるCDしかないわけがあります。こうなると、高齢者は演歌と童謡が好きと言うのは、あまりにも短絡的な決め付けでございして、一方でまた好きな方も多いと言うことも事実であります。そういったことから、また伴侶動物が出てくるんですけども、伴侶動物との共生を考える時にもこのあたりのことはわきまえておく必要があるだろうと考えています。

この写真【スライド 15】の方はこの写真のようにです



【スライド 15】

ね、左側を向いたままの寝たきりの生活でありました。それを見かねた家族がある日、外が見えるようにですね、ここご覧になれますでしょうか?すりガラスが入れ替わっているんですね、上下が。普通上が素透しなんですけれども、これは下が素透しになるようにすりガラスを入れ替えました。これによって何が起こったかと言いますと、外が見えるようになったこの方はその日に右を向いたそうです。数年ぶりに彼女は自ら目的を持って体を動かした。数日の内にこの方は窓ガラスの側に向けて起き上がって座った。そしてなんと自ら手を伸ばして窓を開けたと言うわけでございます。数年来た

だ左側を向いて寝ていた方がです。この方には何人もケアスタッフがベッドに手を差し入れて入れ替わり立ち代り関わってまいりました。それでも何も変わらなかった。それがたった1枚の窓ガラスがこの方を起き上がらせたというわけでありました。この劇的な変化はなぜ生まれたか?理由は簡単でありまして、この窓ガラスだけが唯一、彼女が主語の働きをしたからでは無いかと思うわけでありました。他の様々な関わりはどうしても「私が彼女を何々する」「僕が彼女を何々する」といったものであったと、結局、人は動かされるのでは無く、自ら動くものである。そうなりますと伴侶動物の役割というものは極めてクローズアップされてくるわけでございまして、この辺りに的を絞った伴侶動物との関わりというのも考えてみる必要があるんじゃないかと思っています。

もう一人、動かされるのでは無くというケース【スライド 16】なんですが、この方脳卒中を起こされて、



【スライド 16】

3ヶ月間入院をなさって帰って来られました。拝見するとお体の具合は非常に良く寝返りがお出来るになる。自分で体を起こすこともお出来るになる。一方を見ながら歩くことさえ出来る方だったんですが、実際は全然自らお動きにならない寝たままという方でありました。

この方、実は60年来牛を飼ってこられた方なんです。但馬というのは牛の産地でありまして、そこで一度牛小屋へお誘いしてみようということになりました。まあ色々な準備をちゃんとした上で、牛小屋へ行って見ませんかと提案することになりました。【スライド 17】



【スライド 17】

この牛小屋に着きましたらですね、と言う前に「牛小屋へ行きませんか?」と言う「~か?」が終わる前にですね、このオヤジは自分で起き上がって、靴持って

来い帽子持って来いと大騒ぎになるわけでございましてね。そして牛小屋に着いたとたんこの方は立ち上がりながら自ら歩いて牛の頭を撫でていかれました。結局我々の仕事は動け動けと言って、人を動かすものではなくて、象徴的な意味ですけども牛小屋を見つけることを手伝ったり、それからいざ牛小屋へ出かけようとした時に大丈夫なようにそれに足る体力や動き方を支えるというのがケアの大切な役割ではないかと考える様になっております。もうお気づきのことと思いますがこの牛小屋というのは実は誰にでもあるもので、また人によって皆さん違う牛小屋があるわけでございます。伴侶動物が牛小屋である方というのもきっと多いと思うのですが、今までは実はそういった発想さえ持ち得なかったというのが現実であります。ぜひ、力を込めて進めていきたいと思ひます。

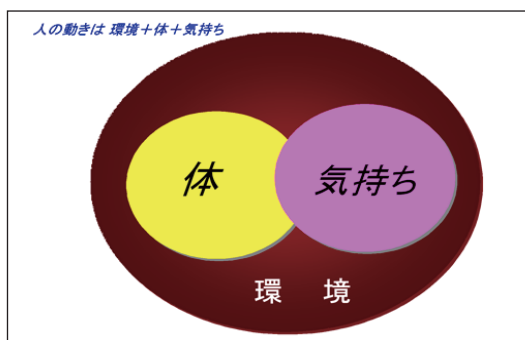
さて、最後は皆で話をする事の効果であります。これは【スライド 18】雪の降り積もって、さらには小雪が



【スライド 18】

ちらついている中を、杖を二本突いて歩いている方の写真です。この写真をご覧になって皆さんどのような感想をお持ちになったでしょうか?と言うのが一つの質問でございまして、きっと「危ないな」と言う見方もあれば「頑張ってるな」と言う見方もあるんだと思うんです。ところがこのようにたった一枚の写真であってもこのような逆の見方も出来るはずでございます。それをたとえば危ないと決め付けてしまったり、あるいは単純に良いことだと決め付けてしまうことは避けたいものであります。その為にはやっぱり色々な人と話をする必要がある。違う価値観の人と話をする必要がある。これは伴侶動物との出会いを広めていく上で忘れてはならないことではないかと思ひます。

これは単純な絵【スライド 19】ですが人の動きは人



【スライド 19】

が動くということは人や物という環境の上に体と気持ちに乗っかって決まってくるというのが自然な考え方あります。先程より申し上げてまいりましたように、人の生活を豊かに支えていく為にはこれらの全てのことが満たされていくことが必要であります。環境も、体も、気持ちも、であります。そして、もしかしたら伴侶動物はその全てに関わる事の出来る大きな要素を持ち合わせているのではないかと思ひます。

これは最後のスライド【スライド 20】でございまして、



【スライド 20】

実は高齢者リハビリが専門の私がお話をすることを辞退しなかったわけはこのスライドにございまして、途中で少し触れましたように実はこれは私の母でございまして。私の母の生活は音楽とそれからパッチワークと正に伴侶動物というべきこのネコでございまして。くろちゃんと言うこのネコなんです、で形作られております。ケアの環境が豊かになりました。高齢者の生活が益々これから豊かになるように、出来ればなるべく冷静にしかも確実に着実に伴侶動物との暮らしが益々広がることを願う次第であります。以上でございまして。有り難うございました。

### 山崎

備酒先生どうも有り難うございました。本当に楽しいお話、そして勉強になるお話だったと思ひます。動物をこれから医療の中に入れて行く中で一番、先生がポイントをついておられると思ひます。特にリハビリテーションの世界では、リハビリテーションのお医者様がいらっしやらないと思ひますので言ってしまうのですが、リハビリテーションの医学の世界というのは例えば足を切断してこれであなたの状態は安定したさあ直ったというところで実はリハビリテーションの医学って終わっちゃうんですよ。誰が歩かせるのだとか、誰がじゃあその人の生活を元に戻すかというOT、PTの先生方。ところがOT、PTの先生方というのは医者がこの人はもう歩けるはずだと言っても、結局モチベーションが無い人を歩かせるというとても凄いな仕事をしなきゃいけないわけですよ、筋肉的にとか、体、関節的には歩けるはずなんだけれども、気持ち的に歩けないというところでやはり動物というのが、非常に大きなモチベーションになるという場合が多いと思ひますので、とてもこれからの動物介在療法には大きな指針になったと思ひます。

それでは次にパネリストとして登場頂くのは地元の皆さんよくご存知だとは思いますが、地元の日本動物福祉協会阪神支部副支部長の松田さんでございます。ご紹介するまでもありませんが、特にこのエリアにおきましては阪神淡路大震災の動物救護本部の副本部長に就任なされた経歴もお持ちでございますし、現在は神戸市の動物愛護推進員としてもご活躍なさっております。ただこういったタイトル以上に周辺的に松田さんにまつわる様々な武勇伝は皆様色々ご存知と思いますので私も楽しみにしております。

よろしくお願ひ致します。



先に言いたいことをおっしゃって頂けたので、少し気持ちが楽になりました。松田でございます。宜しくお願ひ致します。今日はこのお休みの日に皆さんここに集まって頂いて本当に有り難いと思います。本当に知識を得るといのはものすごく大切なことで、私も何も知らないところから30数年ボランティアで叩き上げたというのが本音で、キャリア組ではございませんので現場組でございます。高齢者問題と動物福祉ということで私の知識で得ました経験をお話させて頂きます。日本における高齢者問題が介護保険制度の導入等により福祉事業への企業の参画等を通じてようやく関心が高まってまいりました。しかし、まだまだ不備が多く問題が山積している状況です。高齢者と動物との適正な共生となりますとその端緒も見えないのが実情であり、全てがこれからというところでしょう。我が国では高齢者でなくても集合住宅での共生ということが未だに禁止されているところが多く、この問題も改善すべき課題であるのがこの国の現状であり、残念ですが表題に対する関心は一部の人の間で捕らえられているに過ぎないと感じております。今後このような機会があるごとにどしどしと社会全体に関心を喚起されるように働きかけていくことが第一歩だと考えています。

阪神淡路大震災当時も単身生活者高齢者の問題は孤独死の例もありましたが、動物に救われておられた方も沢山おりました。被災者仮設集合住宅でも多くの方が動物との共生をされましたが、同時に多くの問題を抱えたことも事実ですし、仮設集合住宅の退去に際しては遺棄、放棄が多数に上り私達もその対応に数年間追われてまいりました。

1999年全国初の動物共生集合住宅として兵庫県が北区鹿の子台南住宅55戸、須磨区白川台東住宅44戸、神戸市が北区鹿の子台南住宅35戸、西区玉津町ベルデ玉津住宅34戸、合計168戸の建設をして頂きました。これらの動物共生集合住宅においても当初と現状では少々状況が違ってまいりました。動物と共生が可能な集合住宅と動物との共生が基本的な条件とされる集合住宅、例えば今述べましたような公営の住宅のことですが、そのような住宅で有り様が異なることが分かってまいりました。普通には前者が当たり前となるのが人権擁護の上でも当然であります。動物飼育をするかしないかは問わない混在型の普通の集合住宅が良いと考えます。行政担当者は公的な集合住宅での動物飼育解禁は市民感情が許さないと聞いておりますが、確かに不満を待たれる市民も沢山おられると思います。しかし現状では飼育禁止規定のために適正飼育指導さえも出来ないものであり、いわゆ

る隠れ飼いのために狂犬病予防法に基づく登録もされないのが実情です。かといってそのような状況にある場合に規定違反をたてに集合住宅からの退去も命令出来ず、いかにも日本的な解決で曖昧模糊とした状況を維持しています。規範を厳しくして権利と義務の均衡を指導する方が動物飼育を好まない方々にも不快感の軽減につながり、隠れ飼育のための不適切飼育も抑制出来ると考えられます。一見すると何らの気兼ねも無く動物飼育が出来るとは良いことですが、たとえ同好の仲間であっても、周囲に対する気遣いを忘れては困りますので、動物飼育をしない方との混在による適度な規制は動物に対しても良いことだと感じているからです。そしてこれらの集合住宅の入居者の方々は高齢者が多く、今後の対応次第で人にも動物にも幸せと不幸せ、幸不幸の分かれ道にもなり得ると考えられます。

高齢者の場合、動物が唯一の家族であり友である場合も多く、動物の世話が体を動かす動機としての利点もあり、日常生活における喜怒哀楽の変化も期待出来ます。欧州では動物を連れて高齢者施設に入居されることは当たり前となってきているようです。特にドイツではかなり多くの所で認められているようです。アメリカでは高齢者だけを特別の枠に別枠で認め、集合住宅での高齢者が動物との共生をされる場合は認める方向にあると伺っております。12月上旬にNHKが「ご近所の底力」で集合住宅での動物共生問題を取り上げられると聞いております。犬猫の底力特集をお願いしたいところですね。

我が国では東京で関心が高まりつつあるようですが、地方になりますと動物福祉の考えにも基本がないといって過言では無いと感じることもあり、高齢者と動物の適正な共生を福祉の問題として捉えるには関係者特に行政機関の意識改革が必要だと思います。それだけに行政機関も民間関係者も真剣にこの問題に取り組む必要があります。動物とのふれあいをすることで変化の乏しい日常生活のひと時の潤いや刺激となるように高齢者施設への訪問活動も近年盛んになっておりますが、いわゆるセラピードッグの文言も含めて問題も多々あるようであります。訪問させて頂く側と受けられる側の信頼関係と心身共に健康であり安全な動物を選ぶ、動物にも強制的な服従をさせていないかなど、訪問活動に必要な基本的な条件などを満たしているか、ということも大切です。

高齢者と動物共生で私が体験致しました実例から

特異な例をお話致します。

#### 〔例1〕

単身生活者の高齢者の女性の方で痴呆が、進行するに従い近隣に対して迷惑行為をされるようになり、ご自身が施設入居を余儀なくされる状況でしたが、当時飼育されていた老犬が唯一の心の支えであり、生きがいとなっていました。担当された福祉事務所のケースワーカーの方からの相談を受けて、当の飼い主の女性にお会いしましたが、中々頑固なお方でした。犬も15年の高齢である上に咬癖が有り、咬むことですね。譲渡の対象となり得ず当然ながら安楽死処置にも理解を得られる状況ではなく、経済的にも有料での施設預けは無理でした。幸いその女性からの信頼を頂きましたので、社団法人日本動物福祉協会阪神支部が費用を止むを得ず負担し有料の民間施設に預けましたが、そこへ至るまでの交渉は骨が折れました。犬との別離をするぐらいなら死ぬとまで言われ、犬に支えられて今日に至っておられるご様子は、単に頑固といって片づけられるものではなく、明日の我が身を見る思いでした。民間施設に預けた後も、その犬の面会に女性を犬の保管施設まで案内し、また女性を施設にお送りするという奉仕もさせて頂きました。福祉施設の方々も本当にご親切で犬の預け費用の一部を知人同士でカンパして頂いて私達を助けて下さいました。公的には何らの支援策もなく、現場でのご担当者が最もお気の毒なお立場となっております。

この例では預け先で犬が急性心不全をきたし初回は救命したものの、その後2回目の発作では他界することになり、約三ヶ月の保護預けとなりました。その方を同伴して犬の臨終に駆けつけましたが、その女性の嘆きは激しく犬の遺体の火葬場への搬送にも膝に抱き寄せて別れを惜しまれる姿に心を痛めました。神戸市の動物慰霊碑に度々参拝に来ておりましたが、一段と痴呆が進むのではないかと心配しておりました。その後、福祉施設を替わられたとのことでしたのでその後のご様子は伺っておりません。この例でも基本的な対応マニュアルがあれば当事者全てがこのように苦労を重ねることは無かったです。動物を預けたところが幸いにも動物福祉にご理解のある施設であり、当会の経費の負担にもご配慮を頂き助けられました。長期に及ぶ場合とか保管中の動物の医療費の負担を考えると、一時に複数の動物の対応には応じられないのが実情となります。介護保険の中にもこの様な場合の対応が考えられてこそ福祉の充実といえるのではないのでしょうか。今や動物との共生が単身生活者、特に高齢者の心身の支えとなり社会福祉の費用軽減にも貢献していることは明白だと考えられています。一時入院等であれば動物が待っているということが希望に繋がり、社会復帰を手助けしていることもあるのです。他方で飼い主が不帰の道をたどられた場合の動物の

処遇の問題があります。所有権の処理が順調にはかどるように、動物の所有者自身も日常から遺言書を用意されるように指導されることが良いと思います。高齢者飼い主との問題では動物虐待とまでは至らなくても、しばしば不適切飼育となっている例があります。例2で申し上げます。

#### 〔例2〕

顔面の悪性腫瘍の末期に至る犬の飼い主が虐待で顔を潰したのではないかとの懸念をされた例がありました。単身生活者の女性で生活保護世帯であったのですが他府県まで出向いて知人から犬の譲渡を受けてもらい、医療費の負担が出来ないままに悪化を見過ごした様子でした。やはり福祉事務所の方からの通報があり、当会の費用負担で動物病院での受診と治療を受けて頂いたのですが、その後保健所への引取りを要請された様子でした。せめて動物病院での安楽死処置が出来れば良かったのですが、当方へのお気遣いであったのかも知れませんが、残念ではありましたがご本人の強い決意でそのような結果となりました。

#### 〔例3〕

第3例です。身体障害者である半身不随の女性が飼っておられる犬の例です。

阪神淡路大震災で捨てられていた犬を助け、当時ご健在でした夫と共に犬との生活を楽しんでおられましたが、夫に先立たれた後、犬の世話に非常にお困りでした。犬は8年で排尿障害があり、内向的な性格で誰にでも懐く方ではなく、体格はやや大きめであったために譲渡の対象としては不適切ではありましたが、夫の形見としての捉え方が強く例え譲渡先があっても手放されることは全くないという形で共生を強く決意されていました。しかし、日常の散歩にも大変なご苦労をされていました。健康な大人でも力仕事になる犬の散歩が障害のお有りになるご高齢の方がされるのですから無理は明白でした。民間施設に預ける際にも費用のために長期には預けられず、犬も神経質な性質であり、哀れでもありました。有償の散歩の業者を自費で頼まれた時期もありましたが、費用が高つくとのことで長くは続きませんでした。この方も頑固さと不自由なことが苛立ちになるのか、悪態となって協力者に遠ざかってしまわれました。

#### 〔例4〕

第4例。単身生活者60歳代前半の女性が飼育されている若い大型犬二匹の例です。子犬を見て可愛くて衝動買いをされたのが飼育動機ですが、犬種がロットワイラーであり、しかも誰にも相談しないままに再び衝動買いをされ、二匹となりました。一匹は車庫に閉じ込め、一匹はコンクリートの階段部分に繋ぎ置くという飼育管理が犬に与えるストレスは明白です。近所からの苦情により相談を受け訪問しましたが、この女

性にとってはやはり切り離せない存在のようでした。売り手のモラルを問うことも飼育入手の前に相談出来る人もどこも無かったのかと町内会単位での飼育啓発と相談窓口の必要性を考えさせられる例でした。結局は手放す決意もなく、何となく時間が過ぎていく現状ですが、強制的に飼育中断が出来る程、動物の愛護及び管理に関する法律は動物の保護を保障していませんし、私達の立場でも行政機関としても対応しきれないのが実情でしょう。

これは動物共生住宅の例【スライド1】なのですが、

神戸市営動物共生集合住宅						
ペット飼育可能住宅			H15. 10. 20			
1. 住宅の概要						
住宅名	鹿の子台南住宅			ベルデ玉津		
所在地	神戸市北区鹿の子台1丁目1番			神戸市西区玉津町新方521-1		
棟数	6			2		
総戸数	230			133		
ペット住宅	1号棟			2号棟		
戸数	35			34		
住戸タイプ	部屋タイプ	住戸面積	バルコニー	部屋タイプ	住戸面積	バルコニー
	2DK	51.88	7.56	2DK	50.76	9.44
	"	60.61	10.89			
	3DK	61.35	8.48			
	"	61.35	8.33			
	"	62.48	17.86			
2. ペット飼育の調査結果(平成15年10月)						
	鹿の子台南1号棟			ベルデ玉津2号棟(シブハ-ハイ)		
管理開始	平成10年4月			平成10年5月		
管理戸数	35戸			34戸		
入居戸数	34戸			31戸		
犬	14世帯(19匹)			7世帯(8匹)		
猫	3世帯(6匹)			5世帯(12匹)		
鳥	2世帯(4匹)			-		
犬・猫	1世帯(犬1匹・猫1匹)			1世帯(犬1匹・猫1匹)		
猫・鳥	1世帯(猫1匹・鳥10羽)			-		
犬・鳥	1世帯(犬2匹・鳥10羽)			-		
ペット飼育世帯数	22世帯			18世帯		
飼育していない世帯数	12世帯			18世帯		
飼育世帯の割合	64.71%			41.94%		

【スライド1】

これは神戸市のペット可モデル住宅のことです。高齢者がずいぶん多くなっているということと、今は動物を飼っている方と飼われていない方が混在している状況であります。飼育していない世帯数が12世帯と18世帯あるということですから、64%強と41%強という形で動物を飼っておられる方になっております。

問題点として【スライド2】ですが一つ、動物との共

問題点として	
1. 動物との共生に関する相談窓口が確立していない	
2. 問題の対処に当たり、的確な助言者が少ない	
3. 動物の日常管理費の支援体制がない	
医療費 一時預け費用 飼育料	
狂犬病予防法に基づく登録費用さえもないから飼養を禁止するのか	
共生により当事者が幸福感を得られるのであれば認めて飼育費用の支援をするのか 一般集合住宅での飼養基準と共に検討が必要である	
[現状では狂犬病予防法の登録費用の免除もありますが既に公的福祉の 受給対象となっておられる方があらに飼育を始めたい場合にはとめられることがあります]	
4. 定期巡回して 不適切飼育の防止が出来る体制をとれるか	
人材と経費の問題	
動物愛護推進員の活用の検討	

【スライド2】

生に関する相談窓口が確立していない。これは先程も述べたとおりです。二つ、問題の対処に当たり、的確な助言者が少ない。相談する場所がないということと同じです。三つ、動物の日常管理費の支援体制がない。医療費、一時預け費用、飼育料、狂犬病の予

防法に基づく登録費用さえもないから、飼養を禁止するのか、共生により当事者が幸福感が得られるのであれば認めて飼育費用の支援をするのか、一般集合住宅での飼育基準と共に検討が必要であると思います。四つ、定期巡回して不適切飼育の防止が出来る体制を取れるか、人材と経費の問題、動物愛護推進員の活用の検討も必要かと思ひます。

問題解決への提言【スライド3】として、一つ委員

問題解決への提言	
1. 委員会等の設立	
行政機関	
医療関係者(医師(精神医学担当) 看護師 理学療法士等)	
獣医師 ケースワーカー 高齢者施設管理者等の民間専門家	
動物飼育についての助言者(実務のできる者)	
2. 介護保険の適用範囲の検討	
動物飼育管理費の助成金支給	
3. 動物愛護推進員の活用	
ボランティア奉仕の部分とともに交通費等の一部助成金支給により協力を得やすくする	
4. 一般から基金の募金をする	
基金管理組織の設立(1. 委員会等の設立で組織された団体に委任する)	
2. 介護保険の適用範囲の検討で該当できないものに補助する	
5. 動物愛護団体の協力を要請する	
国内の団体は基盤が弱いものが殆どでありあまり期待できないが個人でも意志のある方に参加していただく	
6. 動物保険制度の検討	
内容や信頼の点で精査が必要	

【スライド3】

会等の設立。問題点としてというところで動物との共生に関する相談窓口というようなことで申し上げましたが、そういう委員会というようなものが、立ち上げられることによってある程度の方が受け入れられるのではないかなと思います。この委員会というのは、行政担当者とか、医療関係者、特に精神心理面がカバー出来る方がご参加頂ける方が良いと思います。看護師とか理学療法士の方々、もちろん獣医師、ケースワーカー、そして高齢者施設の管理者等の民間での専門家、動物飼育についての助言者、実務の出来るものこれは実際に行動出来る人が必要だと思ひます。

二つ、介護保険の適法範囲の検討。動物施設管理費の助成金支給、これは動物の一時ケアをするシッターの派遣費用だとか、期間を限定して長期にはとても負担は無理だと思ひますが、短期間の費用負担がどこまで出来るのかというようなことが検討出来ると思ひます。

三つ、動物愛護推進員の活用。ボランティア奉仕としての部分と共に交通費などの一部助成金の支給によって協力者が増えるということも考えられると思ひます。

四つ、一般から基金の募金をする。常日頃からこういうテーマで募金をし、その募金の管理は一つ目にあげました委員会が管理してもいいのではないかと考えられます。

五つ、動物愛護団体の協力を要請する。但し、私も恥ずかしいことではあります動物福祉協会と名乗りながら、非常に経済的基盤が弱く余り自信がないので大きなことは言えません。ごめん下さい。でも、善意の意思のある方に参加して頂くということで、個人でも大いに参加して頂けたら良いのではないかと考えられます。

六つ、動物保険制度の検討。これは色々な問題点



があるので、今すぐ諸手を挙げて賛成というわけにはいかないかもかもしれません。

これは動物ってこんなに実力者【スライド4】なんで



【スライド4】

すよということをちょっと皆さんにお見せしたかったんです。私たちが訪問活動をさせて頂いている写真なんです。左下の方なんです。この方思わず犬に頬擦りをして涙が溢れでてきたんですね。昔、犬を飼っておられたって仰って下さいました。だから、常日頃はあまり表情を出されない方でも本当に動物にふれるということで、思わぬ反応で思わぬ良い場面を見せて頂くことがあると思います。私達は必ずこうして、その日に訪問した人が、誰がどんな動物を連れて訪問したかということ写真を取って記録に残しております。

これは過去のお話【スライド5-1】ではありますが、こ



【スライド5】

の小屋にこの高齢の女性が姉妹で住んでおられたんですね、ここに犬がおります。犬も二匹、三匹とおります。ネコも数十匹おりました。そしてこのネコは全部、紐で結わかれてるんです。それはなぜかと言うと私達が訪問してネコが余りにも可愛そうな状況だから連れて逃げはしないかという心配で何時もくっつけておられました。そして、幾ら指導しても私達の助言には一切耳を傾けるということなく、自分の意思が通せないんだったら、近くにお話し向けに線路があるんですね。そこに飛び込むからかまってくれるなど何時もそういう脅しで、私達は止むを得ず食料とかお運びするだけで帰らせて頂いてたんですが、水道もなくご近所から貰い水をしておられて、水道だけは私共の会員の篤志家が市に働きかけて、水道を引くことをさせて頂きまし

たけど、結局水道はお使いにならなかったですね。

それは生活がそういうふうにならなかつた本当に恐ろしいことで、水道を使うという生活習慣が全く無かつたように思います。その位追い詰められておられた。この方はやがてその後お姉さんの方は特別養護の方にご入居なさいまして、妹さんの方はこの粗末な小屋の中でお亡くなりになるという、救急車を呼んで病院には行きましたけれども、お亡くなりになるという結果を招きました。そしてこちらの方【スライド5-2】はかなり資産的にはそれ程ご苦労は無かつたんですが、ヨークシャーのコレクターになつてしまわれて、本当にヨークシャーに熱を上げてしまつて、暑いときでも本当にこの毛布の中で囲っているということを可愛がっていると思ひ込んでおられて、まあちょっと精神にも障害をきたされて入院されて、私達が結局引き取ることになりました例です。

これもやはり有名な天理の写真【スライド6】なんで



【スライド6】

す。今も奈良県の行政獣医さんがお見えになって居られますから、思い出されるかもしれませんが、これもやはり高齢者が動物のコレクションということでやっておりましたけど、こういう動物のコレクターになれる方って非常に寂しい方が多いんだと思うんです。だからこの自分で虐めてるということの前に、この動物達を助けてるという錯覚を持って自分を救っておられるんだと思います。そしてこの動物達もご老人が亡くなられた後、それぞれ散り散りになったり、この女性の方が別に買った施設がその後も存続して、行政の方が非常にご苦労なさつてその後その対応に当たられたということもございました。でもこの施設に持ってくる健全な人がいるということも若い人がいるということもすごく怒りを込めて訴えたいと思います。

これが先程のロットワイラー【スライド7】なんです。こんな階段ですから夏は暑くて冬は吹きっ曝しでとても寒い。そしてこの部分がガレージの部分になるんですが、このロットワイラーは何時もこのガレージに日常は閉じ込められています。それで苦情が来ない飼い方になるという方が不思議だと思ひのですが、この方もこの犬達がいなくて寂しくておれないという状況ではあつたようです。



【スライド7】



【スライド8】

そしてこれは最後にちょっとホッとさせる写真【スライド8】  
を皆さんに見て頂きたいと思います。これは私の家のす  
ぐ裏が河原になっておりまして毎日こうして散歩に来て  
下さるんですね、本当に微笑ましくて嬉しい光景だど  
思います。そしてこういう愛されている動物を見るとい  
うことは私達自身がすごく心が慰められるんですね。

そしてこうやって【スライド9】 何時もこれの往復を朝



【スライド9】

晩なさっておられるんです。でもこのご主人自身が高  
齢の域に達しようとしておられますので、この犬の上  
げ下ろしにぎっくり腰になって非常にしんどい思いをし  
ばしばすとは訴えておられました。でもとてもお優し  
い方で本当に微笑ましい光景だと思います。以上です。

## 山崎

どうも有り難うございました。地元の松田さんが実際  
に経験されている例を沢山拝見させて頂きましたけれ

ど、これは日本全国共通してどこでもこういった光景が  
繰り返されています。ですからその辺りこれからどう  
やって対応するかっていうのはこれは正直言って動物  
愛護団体が最初から取り組むべき問題ではないんです  
ね。最初はやはり人間の福祉あるいは精神衛生という  
行政の機関が入り、動物の保護、動物を引き受け  
るっていうのは事後作業として動物愛護団体が入るべ  
き、あるいは保健所等でも動物担当の行政官が先に入  
るのではなくて、人間担当が先に入って動物担当者が  
その後事後処理をするという風な形が入るべきことなん  
ですけど、中々そこがメディアの報道を見てても動物  
問題としてフォーカスされてしまいます。実は人間問題  
であるということをどうやって我々社会の意識を覆して  
いかかということを非常に考えさせられると思います。

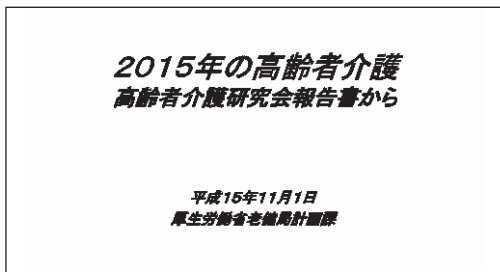


よろしくお願い致します。

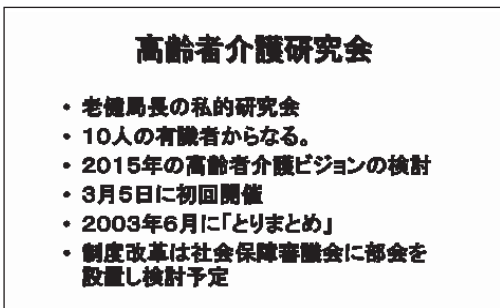
ご紹介頂きました厚生労働省の館石と申します。オームロッド先生スコットランドから遥々ようこそお越し下さいました。また、先程は大変示唆にとんだプレゼンテーションをして頂きまして本当に有り難うございます。

今日のテーマは高齢者と伴侶動物の楽しい暮らしということなんですが、実は私共が担当しておりますのはこの内高齢者に関する施策の部分でございまして、しかもどちらかといいますと元気なお年寄りというよりは介護が必要になったお年寄りの暮らしをどう支えていくかというのが主たる仕事なんです。ですからちょっと今日のテーマにストライクでこうお答えすることが出来ないかも知れませんが、しかし、先程のオームロッド氏のお話の中でも痴呆の高齢者と動物の関わりで、痴呆のお年寄りにとっても良い効果が現れることがあるというご紹介があったかと思えますけれども、その辺のところを少し糸口にして今日のテーマに沿ってお話出来ればなと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

初めに一応タイトル 2015 年の高齢者介護とさせて頂きました。【スライド 1】



【スライド 1】



【スライド 2】

このタイトルを付けた理由は実は高齢者介護研究会【スライド 2】という、私共厚生労働省老健局長の私的研究会を今年設置をしまして、10人の有識者から構成された研究会だったんですけれども、今から12年後、2015年には今の国の高齢者ケアシステムをどうすれば良いのかと

いう長期ビジョンについて議論して頂きまして、この6月に報告書を取りまとめで頂きこれからの高齢者介護はこう在るべきですよというふうにご提言を頂いたものです。国としてはこの提言に沿って出来るだけ出来るものは直ちに、時間をかけなければいけないものは一つ一つ施策にしていこうと、今こういうところに取り組んでいるところであります。

さて何故 2015 年【スライド 3】なのかということなん

**2015年を論ずる意義**

- 戦後のベビーブーム世代が65歳以上となるのは2015年
- 2002年から2015年までの65歳以上人口、高齢化率の伸びは、2015年以降の伸びと比較して際だって高い。
- 2015年の前期高齢者は、その後にく10年間に後期高齢者となる人々。前期高齢者について、実効性のある介護予防の取組が2015年までの間に確立できるかどうか、その後の時代の後期高齢者介護についても決定的な意味を持つことになる。

(高齢者人口とその割合の年次推移)

	2002年	2015年	2025年
65歳以上人口 (増加数)	23,628千人	32,772千人 (+9,144千人)	34,726千人 (+1,954千人)
(伸び率)		(+ 38.7%)	(+ 6.0%)
高齢化率 (上昇%)	18.5%	26.0% (+7.4%)	28.7% (+2.7%)

【スライド 3】

ですが、第二次世界大戦が終わって、いわゆるベビーブームという時代、団塊の世代と呼ばれることもありますが、1947年から1949年までに生まれた方々ですね、この3か年に生まれた方々だけで相当な人口を構成しているのですが、1947年から1949年までに生まれた人達が皆65歳になるのが2015年ということです。そして今現在からその2015年までの間に65歳以上になる人がどれだけ増えるかというこの高齢化率の伸びは、その後と比べて著しく高いということです。特に埼玉県とか千葉県のような人口構造の若い構成になっている県ほどこの傾向が著しくて、このわずか十数年の間に高齢化率が倍以上に伸びるといふように予測されております。なので2015年を論じてみようということです。

さて 2015 年【スライド 4】になった時の我が国の高

**2015年の高齢者像・1**

- 引退した雇用者の増加
  - ・ 雇用者の割合
    - 1935年以前生まれの世代 :50~60%
    - 1946年~1950年生まれの世代 :80%程度
- 高齢単独世帯の増加
 

	(2006年)	(2015年)
・ 高齢世帯数	1,289万世帯	→ 1,669万世帯(28.7%増)
・ 高齢単独世帯	366万世帯	→ 497万世帯(35.9%増)
- 在宅での介護者(意識の変化の可能性)
  - ・ 在宅での介護を希望する高齢者が「介護を要し希望」(1996年度→2002年度)
    - 子供 71.4% → 52.8%
    - 子供の配偶者 38.2% → 25.3%
    - ホームヘルパー 12.6% → 19.1%

【スライド 4】

齢者像として考えられておかなければいけないことを幾つか言いますが、まずお年寄りだけの世帯、或いはお年寄りの一人暮らしの世帯が著しく増加することになります。先程も高齢者は多くの喪失体験に遭遇するというお話がありました、であれば尚更新しい伴侶として動物との接点を求めていくという人々がこれから増えていくかも知れません。

**2015年の高齢者像・2**

**○ 居住環境の重視**

- ・ 新設される住宅の居住面積は、持家住宅については、戦後の機関を過し一興して拡大、賃貸住宅についても、1990年代に一時縮小したものの、その後は拡大。
- ・ 40歳～64歳の約6割は、高齢期にも改築を行うなどして現在の住宅に住み続ける意向である一方、他の住宅に住み替える意向を持っている者も約3割

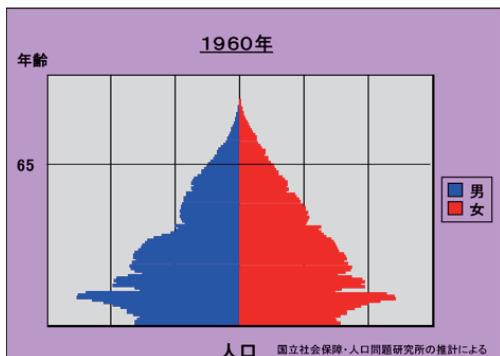
**○ 消費と流行を牽引してきた世代が高齢者に**

- ・ 1961年(ベビーブーム世代が、小学校高学年～中学校) → テレビの普及率が6割を越える。
- ・ 1982年(ベビーブーム世代が、30歳代半ば) → 乗用車の普及率が6割を越える。
- ・ 子供時代のテレビを遍した全国共通の体験や30代半ば以降の乗用車保有によるレジャー体験、近年のインターネットの利用拡大等は、今後の高齢者としての消費生活にも大きな影響を与えたと考えられる。
- ・ これからの高齢者は、従来の高齢者以上に各々の価値基準に応じて、多様な選択肢の中から主体的に消費を選択していくようになり、多様なニーズに応じたサービス等への欲求が高まると考えられる。

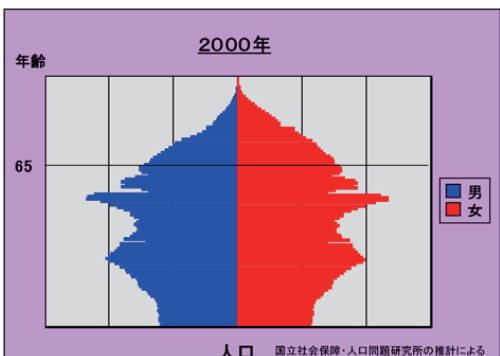
【スライド 5】

それからこのベビーブーム世代の人達【スライド 5】は戦後の消費と流行と牽引してきた人達です。今の高齢者よりもご自分の好みや主張をはっきりされるという特徴が恐らくあると思いますので、色々なご希望に応えるためには福祉サービスも多様な選択肢を用意しなければいけないだろうというふうを考える必要があるのだと思います。

人口構造の変化をこのピラミッド【スライド 6】でご覧頂きますが、これは 1960 年の時の日本の人口ピラミッド、青色が男性で赤色が女性です。【スライド 7】



【スライド 6】

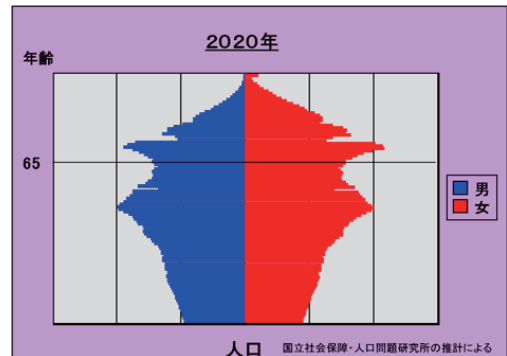


【スライド 7】

らが人口ということでこの戦後のベビーブームの世代ですね、先程出てきた 1947 年から 1949 年の世代は他の世代と比べてボーンと男女共に著しく人口が多くなっています。何で 1960 年かということこれは私が生まれた年であります。

1960 年【スライド 7】、40 年前にはこれしか高齢者がいなかったのですが、これが後 20 年経つとどうなるかです。

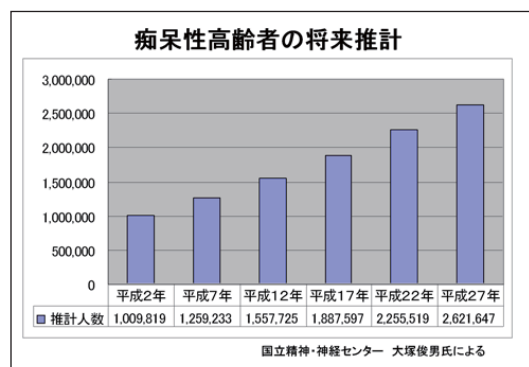
2020 年になりますと、こうなると予測されております。【スライド 8】先程の高齢者は皆 70 歳になります。その



【スライド 8】

5 年前に 65 歳に到達するというのですが、この人口ピラミッドの動きを見ると、暮らしを支えられる側と支える側という見方、これは必ずしも良いかどうか分かりませんが、この日本の社会保障全体を考える時にこの人口構成が急激に変わっていくということは、これに対応するにはどうすれば良いか今から真剣に考えておかなければいけないということだと思います。

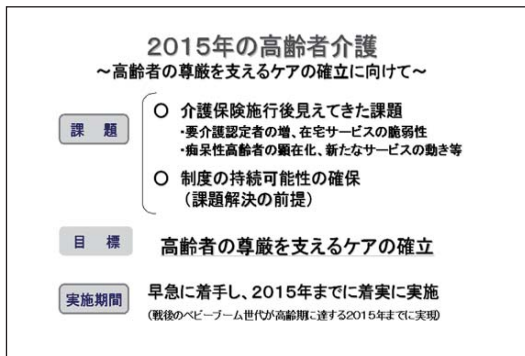
さあそこで私が担当している痴呆の分野のお話なんですが、今は丁度ここですね 2003 年です。【スライド 9】



【スライド 9】

日本全体で生活に殆ど支障の無いようなごく軽いレベルの痴呆の方まで含めると大体 160 万人位いるだろうと推測されています。2015 年になりますと更に 100 万人位増えて 260 万人位になるだろうといわれています。ですのでこの間毎年 8 万人とか 9 万人というペースで痴呆の高齢者が増えていきますので、この方々の暮らしをどう支えるかというのは今世紀前半の日本の

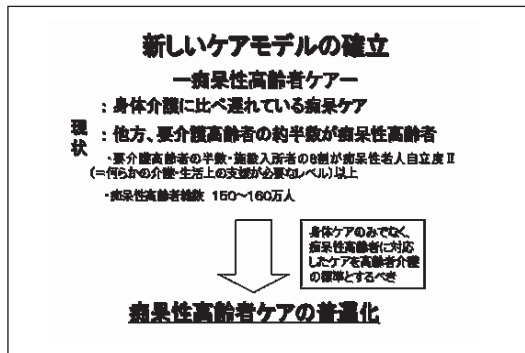
最大の問題だといっても言い過ぎではないと思います。  
そこで先程の報告書 2015 年の高齢者介護では目標をこの様に立てました。【スライド 10】 高齢者の尊厳



【スライド 10】

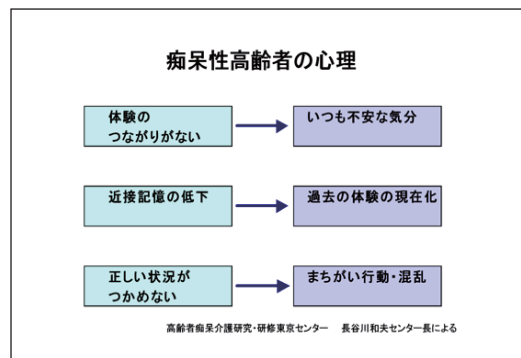
を支えるケアの確立。痴呆になってもその人らしい暮らしで尊厳が保たれるように支えていくことを一番大事にしようということです。

そのお話なんです、先程申し上げましたように痴呆の高齢者は既に 160 万人位います。【スライド 11】



この方々は更にどんどん増えていきます。ところが現状は今のそのケアモデルというのは身体的な障害を中心にどちらかというと構成されていますので、必ずしも痴呆に対するケアの方法が十分確立していない状況にあります。これからは痴呆の方々がどんどん増えていくわけだから、そうじゃなくて痴呆の方が暮らしやすいようなケアの仕組みってどうなんでしょうとまず考えて、そして身体的な障害を負った時に更にどういうふうに対応すれば良いのだろうかとか基本的な考え方をがらっと入れ変えてしまう必要があるのではないかと、痴呆性高齢者のケアこそ普遍化すべきではないかという提言であります。

そこでちょっと痴呆の方の特徴を簡単にご説明【スライド 12】をしておきますが、痴呆の症状の中心を成すのが著しい記憶の障害です。直前にあったことも完全に忘れてしまいます。例えば人間誰しも年を取れば物忘れをするようになりますが、朝ご飯のおかずの一部が思い出せない。テレビに出てきた俳優の名前が思い出せない。これは誰しも経験する普通の物忘れですが、ご飯を食べたことそのものをスッパリ忘れてしまう。食べたのに食べていないと言い張る、これが痴呆の物忘れである。ある記憶の完全な脱落というふうにいってもいいかも知れませんが、これが痴呆の物忘れの特

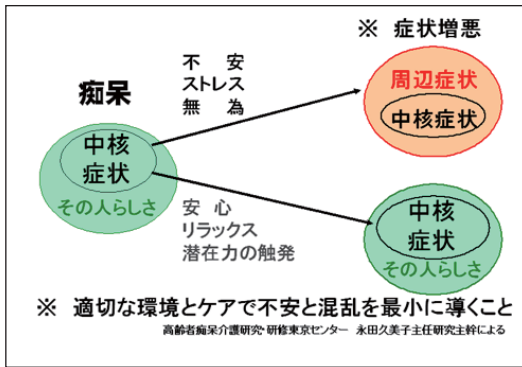


【スライド 12】

徴であります。皆さんも考えて下さい。何故、今ここにいるのか直前の記憶が全く途絶えていると、ここはどこ？私は誰?になりますね。ですから痴呆のお年寄りは常に不安な状態に置かれているということです。それから、もう一つの精神機能の障害として認知障害、あるいは検討意識障害と呼ばれますが、時間とか場所或いは人物等について正しく認識出来なくなります。なので直前のことがスッパリ記憶が脱落してしまい、時間や場所が正しくつかめないとすると痴呆のお年寄りの行動は常に間違いがち、混乱しがちになります。しばしばまわりから見るとなんであの人あんなことしているんだろうかというふうになりますが、ご本人にとってみればちゃんと理由があってしてること、このことを前提に考えればなぜこの不可解な行動をするのかといったことが理解出来る場合がしばしばあります。

それから記憶の障害は新しいことを覚えられませんが、新しい記憶から古い方向に向かって失われていきます。ですので非常に古い記憶というのは例え断片的であったにせよ、しばしば非常に鮮やかに残っていることがあります。先程のお話にも出てましたが、若い頃犬を可愛がって育てたお年寄りがある時ホームに訪問して下さった。犬に対面した時にひよっとしたらその時に記憶が飛んで、当時のことを思い出し、あたかも当時の自分が飼っていた可愛がっていた犬とダブっているかも知れない。そんなことがあるかも知れません。それを過去の体験の現在化というふうに言ったりします。家に帰りたいと痴呆のお年寄りが言う時は直前に住んでいた家ではなくて、若くて元気だった時に家族と一緒に暮らしたその時の家に帰りたいと言っていることがしばしばあります。そんなことでそういう痴呆のお年寄りの特徴を周囲の人達が正しく理解してあげれば、そこそこ暮らしを支えていくことが出来るのではないかとことです。

ちょっと図【スライド 13】を変えますが、さっきご説明したような痴呆の特徴を理解して周囲の人が正しく対応してあげれば、そこそこその人らしさを保ちながら暮らすことが出来るのではないかと、痴呆は決して治るわけではありませんが、安心してリラックスして暮らせる環境においてあげて、現在残っている力を 100%生かすようなそんなケアを心がけていけば、痴呆と上手に付き合いながらその人らしい暮らしを続けることってきつと出来るんじゃないかということです。それに反して周



【スライド 13】

周囲の人々が正しい対応をしなれば、周りに対して暴力的になったり、不潔な行動が現れたりという周辺症状といったりしますがこういう大変な状態になってしまうことがある。ここが大きな分かれ目であるということです。ここで大きな分かれ目であるということですね。ですので痴呆のお年寄りを支えるポイントは適切な環境において差上げて、そして痴呆の特徴を正しく理解したスタッフが正しくケアをして関わってあげれば、不安と混乱を最小に導いてその人らしい楽しい暮らしを支援していただけるのではないかと、こういう基本的な考え方に立っています。

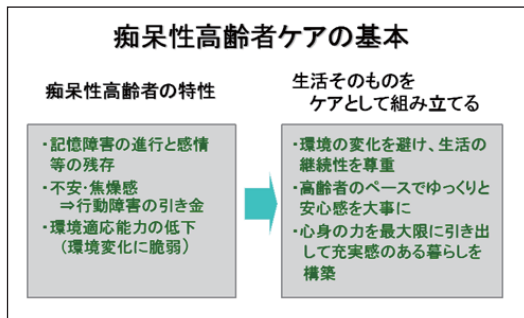
そこで報告書でも痴呆性高齢者ケアの基本は最後まで尊厳を保つようにということ、そしてもう一つは日常生活圏域を基本としたサービスを構築しようということです。遠く離れた施設に行って、そこで新しい暮らしに入るのではなく、住み慣れた地域の中に小さな施設が、拠点が身近にあって、そこで暮らしが継続出来ればよいのではないかと認識ですね。【スライド 14】

### 痴呆性高齢者ケアの普遍化

- **痴呆性高齢者ケアの基本＝「尊厳の保持」**
- **日常生活圏域を基本としたサービス体系**
- **ケアの標準化・方法論の確立**
- **痴呆性高齢者と家族を支える地域の仕組み**

【スライド 14】

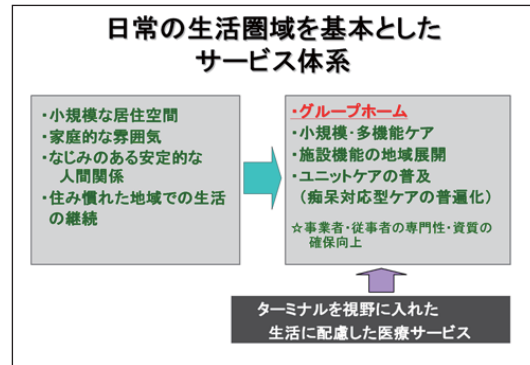
もう少し具体的に言いますと、一口に言えば生活そのものをケアとして組み立てていく、こんな発想が必要ではないかということです。【スライド 15】



【スライド 15】

そしてそのポイントとしては先程申し上げましたが、遠く離れた場所に移るのではなく、環境の変化を避

けて住み慣れた地域での生活が継続出来るように気を使ってあげましょうということです。もう一つ、とかく現在の生活は時間に追われがちですが、そうではなくてむしろ我々の時間感覚がアブノーマルであるという意識に立って、高齢者のペースを尊重してゆっくりと暮らして頂けるように援助していきましょう。そして痴呆になったからといって全ての機能が一度に失われるわけではありません。現在その人に備わっている機能を最大限に引き出してあげるよう、充実した充実感ある暮らしを送って頂けるように援助していきましょう。こういうことです。【スライド 16】



【スライド 16】

それを具体的に形にしたものが幾つかあるのですが、二つだけ紹介します。

一つはグループホームです。痴呆のお年寄りが安心して身近な地域で暮らせるための小さな介護施設です。それからもう一つは大きな施設もこのグループホームで実践されたケア環境を導入しようということで、新たな試みがあります。これはユニットケアと書いてあります。いわば大規模施設を小さなグループホームの集合体のような構想にリフォームしていこうという考え方ですね。グループホームで実践されているような一人一人の生活のリズムを大切にされた個別ケアの考え方を大規模施設にも導入していこうということです。そしてこういった暮らしを、地域の医療が出来るだけその場所で最後の時まで支えられるように、ターミナルケアまでを視野に入れた、しかも生活に配慮された医療として従事していくということですね。痴呆の暮らしを支える時は医療が主体ではなくて、生活を支援する様々なサービスが主体となって、医療の必要な時に必要なサービスを外から利用出来る仕組みが求められています。

もう一回痴呆のグループホームの特徴【スライド

### グループホームケアの特徴 ①

- 小規模な居住空間
- 家庭的な雰囲気
- 少人数の安定した人間関係の継続
- 地域に溶け込んだ普通の生活

↓

☆ 認知能力の衰えた高齢者の混乱を最小限に抑えて、安心感を醸成。

【スライド 17】

## グループホームケアの特徴 ②

- 職員と入居者とのコミュニケーションを大切にケア
- 入居者一人一人の個性と生活のリズムを尊重したケア
- 共同生活の中でできる限り役割を發揮

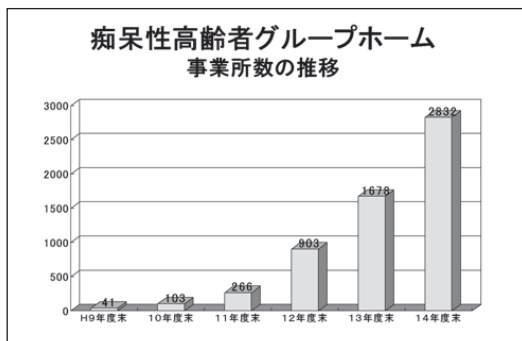
☆ 生活の意欲を引き出してその人らしい暮らしを継続できるよう支援

【スライド 18】

17,18] をお話ししますが、家庭のスケールとあまり変わらない小規模な居住空間で、出来るだけ家庭的な雰囲気がかもし出されるように配慮をします。お年寄りの数も、日本の制度では 5 人から 9 人までになっておりますが、少人数の高齢者と少人数のケアスタッフが、いわば顔の見える関係で生活を共にする。そしてもう一つ大切なことは、住み慣れた地域に溶け込んだ普通の生活ですね。施設だけが地域の中で浮き上がるのではなく、まさに町内会の一構成要員として普通の地域の中に溶け込んだ暮らしが出来るように、そして認知能力の衰えた高齢者の混乱を最小限に抑えて逆に安心して暮らせるように導いていこうということです。

もう一つは施設側の日課に従った暮らしではなくて、一人一人の個性やリズムを出来るだけ尊重しよう。朝寝坊したい人は無理して起きてきて皆と一緒に食事をしなくてもいいじゃないですか。お風呂は皆夕方入るけれど、昼に入りたいという人がいてもいいじゃないですか、ということです。そうすると、今まで以上に一人一人が何を考えて何を希望しているかということ把握しないとイケませんので、職員と入居者とのコミュニケーションの尊重が何よりも求められるということです。出来れば共同生活の中で、出来ることはご本人にやって頂けるように役割が發揮出来るような場面が作られるとなお良いですね。もしペットを飼われた時に、そのペットのお世話をしてあげるという立派な役割になります。そうすることによって生活の意欲を引き出しながらその人らしい暮らしを継続出来るように支援していこうじゃないかと。

このグループホーム、実はものすごい勢いで増えています。【スライド 19】 介護保険がスタートした西暦 2000 年には全国に 266 箇所しかありませんでしたが、丸 3 年たった今年の 3 月には 2800 を超えました。3



【スライド 19】

年間で 10 倍以上に増えています。その位ニーズを捉えたサービス形態であるかと思えます。ただ最も数だけ増えれば良いということではなくて、そこで提供されるケアサービスの質、これが最も重要な局面に来ているということだと思います。

ユニットケアをもう一回説明します。【スライド 20】 グ

## ユニットケアの推進 ①

- ユニットケアとは、「施設の居室をいくつかのグループに分けて」、「それぞれを一つの生活単位とし」、「少人数の家庭的な雰囲気の中で」ケアを行うもの

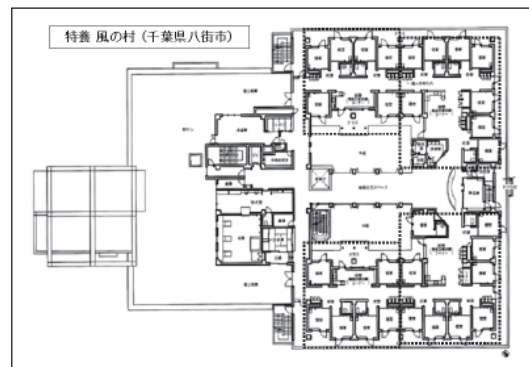
- 平成14年度より、全室個室・ユニットケアの小規模生活単位型特養の整備を推進

【スライド 20】

グループホームの良いところを施設に応用したのがユニットケアという試みですが、施設の居室を幾つかのグループに分けて、そしてそれぞれを一つの生活単位として、少人数の家庭的な雰囲気の中でケアを行おうということで、先程も言いましたがグループホームの集合体のような形に作り変えていこうという試みです。そして国としては 2002 年からこの新しいナーシングホーム・特別養護老人ホームを作るときには全室個室でこのユニットケアスタイルのものを標準のものとすると明確に政策を打ち出して新たな整備・施設整備費補助制度を設立したところです。

ちょっと具体例を一つだけご紹介致します。

これは千葉県にある特別養護老人ホームの平面図【スライド 21】なのですが、一つの居室なんですけれど



【スライド 21】

も、これが無造作にお部屋が並んでいるわけではございません。

このように例えばこのスペースであれば居室が 1・2・3・4・5・6 とこう並んでおりましてその中央に家庭と変わらないようなキッチンがあって、居間・リビングスペースがあります。この 6 人のお年寄りがグループホームのような形でここで暮らせるように、そして同じようなユニットが 1 フロアの中に 4 つ配置されている、こんなふうに変更していこうということです。

実は国の政策としてはまだまだそこまでいってませ

んが、こういう一人一人のお年寄りの希望やそれまでの暮らしぶりに配慮した支援をしていこうという中で、やはり若い頃から動物を飼っていたお年寄りは、施設の中で動物と一緒に暮らしていくという時に、非常に今まで表情がはっきりとしなかったものが生き生きとした表情を取り戻したりといわれています。何枚かご覧頂きますが、

これは浜松市にあるグループホームで、この方はもう自分のご主人の写真を見ても判らないような完全な痴呆のお年寄りですけれども、こうやって猫と一緒に過ごしている様子ですね。【スライド22】この方が元々飼っ



【スライド22】

ていた猫ではなくてグループホームが皆の愛玩動物としている猫です。

これも同じホームで飼われている犬ですね。この方ももうはっきりとした痴呆です。【スライド23】完全な中等



【スライド23】

度以上の痴呆ですけれども動物と一緒にいる時はこんな表情を見せてくれることもあります。

これは北海道のある田舎町にあるグループホームで



【スライド24】



【スライド25】



【スライド26】



【スライド27】

すが、先程の動物だけではなく植物との関わりという話も出ました。若い頃から庭いじり・お花をととても大事にしていた方ですけれども、グループホームに入ってからもうこうやってお花のお世話をしています。【スライド24】

これは家の中ですけれども、この方もはっきりとした痴呆ですが、とても良い表情で過ごしておられます。【スライド25】

同じグループホームですが、やはり犬を飼っています。【スライド26】誰かが飼っていた犬ではなく、ホームで飼っている犬です。動物好きの人が集まって皆で可愛がっています。とても良い表情ですよ。犬もすっかりお年寄りに安心して体を預けています。【スライド27】

グループホームですが、この方はやはり若い頃からセキセイインコをととても大事に飼っていた方で、時々痴呆の為不安の為に落ち着かなくなっても、この鳥のところに来て鳥の鳴く様子を眺めているとすっかり穏やかさを取り戻す様子が日常の中でよく見られるそうです。【スライド28】

それで最後にビデオを5分程、見て頂いて話を終わりにしたいと思うのですが、先程これからの痴呆性高齢者ケアのあり方は生活そのものをケアとして組み





【スライド 28】

立てることが大切だと言いました。これまでの痴呆性高齢者をケアするあり方を反省的にみますと、どちらかというと施設の中で外に出られないようにして、閉鎖空間の中に閉じ込めてしまうようなケアが行われていることがよくあります。目を離している間に居なくなってしまって、例えば電車にはねられてしまった痛ましい事故もありますから、その為に徘徊などを予防するために鍵をかけてしまうということが行われていました。しかしそれではお年寄りの尊厳を保障したケアといえない、出来るだけ外出したいという希望には答えて差し上げる。そして地域の人たちとのふれあいの機会を普通に作ってあげる。そして公園へ出て行けば動物を連れてきた人とそこで出会いがありますよね。まさに動物を通じた話題から人と人の交流の繋がりが広がっていくという、良い形で場面展開が出来ていくと思います。こういうことをこれから目指していこうということなのですが、もう既にその実践を通じて立派な成果を挙げているグループホームも沢山出てきました。それで私の話の最後は、東京都足立区にありますあるグループホーム『こもれび』という施設ですが、もう皆さん中等度以上の立派な痴呆の方々ですが、職員の援助を受けながら地域に溶け込んでいる本当に普通の暮らし、生き生きとした表情を見せて下さっている写真約 50 枚を BGM に乗せてご覧頂いてお話を終わりにしたいと思います。お願いいたします。

【ビデオ上映】

皆さん本当に普通の人に見えますが、痴呆を抱えていらっしゃる方が多いです。痴呆の方ばかりです。

【ビデオ終了】

はい、どうも有り難うございます。決して施設の関係者の方々だけではなく、周りの住民の方々が痴呆のお年寄りのことをきちんと理解して、一緒になって支えてこそ出来る場面なので、一番最後のカットに、あなたも一緒に新しい痴呆ケアを取り入れてみました。これで私のお話を終わりに致します。

## 山崎

有り難うございました。非常に良いものを見せて頂きました。見ながら思い出したのですが、先程のエデンの園の代替作の基本となったイー・オー・ウィルソンの説の中では、自然なノーマルな環境を与えることで人間が非常に良い状態になるということで、動物・植物

と実はもう一つ要素があるのですね。ビデオを見て思い出したのですが、あらゆる年齢層の人間が回りに居ることなんです。ですからご老人だけを隔離するということではなくて、お子さんや中高年の方色々な方が居ること、特にイー・オー・ウィルソンの説は子ども、若い人間それから動物・植物というものが非常にノーマルな環境をもたらすということですから、まさにその説にかなったお年寄りの生活環境かなと思います。

## パネルディスカッション

座長 山崎 恵子 (ペット研究家)

パネリスト

エリザベス・オームロッド (SCAS 会長)

館石 宗隆 (厚生労働省老健局計画課 課長補佐)

備酒 伸彦 (兵庫県但馬県民局但馬長寿の郷 企画調整部 地域ケア課 主査)

松田 早苗 (社) 日本動物福祉協会 阪神支部 副支部長)



山崎

それではまず最初にパネリストの先生にお願いしたいのは、多分ご自分のご発表をなさるのみならず、他の先生方のご発表を皆さん熱心に聞いておられましたので、それに関してご自身で質問、あるいは他のスピーカーの先生方から出された点に関してコメントしたいこと等おありになると思いますので、誠に申し訳ございませんが、2分位にまとめて頂いて、お願いしたいと思います。それではまず最初に外国からのお客様より、他のスピーカーに対するコメント、あるいはご質問がありましたらお願い致します。

オームロッド

非常に興味深い会議であったと思います。そして思ったのですが、我々がやはり人の環境を豊かにしていかなければならない、そして私獣医師として何時も動物の環境を豊かにすることを考えてきております。人が飼う動物、あるいは農場の動物、ペットとか或いは様々なところの動物、出来るだけそれらの環境を良くしたいと考えてきました。そういうことがまた健康、そして幸せを守るものであります。また英国で仕事をしておりまして、やはり人の自然環境にはまだまだ注目されていないということですね。自分の選択肢がなかなか選べない人達があります。そこで最後のお話を聞きまして特に感銘を受けました。これは本当に一番重要な問題を突いていらっしゃるという気が致します。私思うのですが、他の方々、世界中に同じような立場の方達がおります。このような態度を採り得るべきだと思います。有り難うございました。学ばせて頂きました。

山崎

有り難うございました。次はプレゼンテーションの順番と普通はなりますが、特に今オームロッド先生が大変感激をなさったというプレゼンテーションで館石先生の方から何かコメント、他のスピーカーへのご質問等ございましたらお願い致します。



館石

今オームロッド先生からお話がありましたが、これはもう国を問わず、こういう地域に開かれた暮らしが痴呆になったとしても保障されるような仕組みを作っていかなければいけないと思います。実はグループホームという制度のデザインそのものはスウェーデンを参考にさせて頂いているのですが、そこで介護するケアの有り様というのは、実は〔オームロッド先生の〕お国の英国なのです。英国のナショナルサービスフレームワークという保健省が作っている枠組みがあるのですが、その中にパースンセンタードケアという言葉でその第2番目の柱として紹介されているのですが、まさにそのお考えを取り入れた人を中心としたその人らしい暮らしを保障していくには、環境や周りの関わりをどうしたらよいかというそういう形で、そこを基本に据えた考え方です。まさにその英国の取り組みも私達は勉強させて頂きながら政策しています。

山崎

有り難うございます。それでは備酒先生の方、如何でしょうか。

備酒

えー、皆さんをドキッとさせるようなことになるかも知れないのですが、今館石さんのお話を見て多分安心なさったと思うんですね。日本もこっちへ向かってきたかと・・・。一方で実はそのグランドデザインという極めて精緻なものが厚生労働省で、館石さんも多分旗印に頑張っておられ、出来つつあります。しかし実際のケアの質の担保がなされているかと問われれば、まだまだ極めて低い状況なのですね。ですから私は多分皆様とは違う目で先程のビデオを見ていました。あれを如何に実現するのかということが、もう今からすぐに

駆け出して行ってやりたいという位の状況なのですね。そうなった時に、是非この伴侶動物のことを考える時にも、ここでまたオームロッド先生はじめ館石さんも含めて特に伺いたいのは、皆様がお持ちの情熱をどうやって人に伝えていこうとなさっているのか、あるいは特に館石さんについてはそのあたりの教育についても、これは厚生労働省がとっては駄目なのですが、折角ここまで情熱豊かにプレゼンテーションして頂いたので私見を、どうやってこれを教育していったらよいのかを教えてくださいたいです。ですから皆さんに伝え方についてビジョンをここでお示し頂きたいと思えます。

#### 山崎

有り難うございました。それでは、ご質問をここにメモしておきまして、次に松田先生宜しくお願ひ致します。

#### 松田

松田でございます。あのオームロッド先生のお話の中で英国でもまだまだそのような面に進んでいない部分もあるという話を聞いて、ああそうなのかと思って、我が国だけではないという変な安心感といいますかそういう部分と、努力次第で諸外国の状況にもっていくことが出来るのではないか、その努力をどこで誰がするのかといったら、ここに来ておられる皆様方がリーダーだと思ふのです。誰かがやる動物福祉、誰かがやる人間福祉・・・ではないと思ふのです。私いつも申し上げているのは、私がやらないと誰もやってくれないよと思って頂かないとやれないから、私はいつもでしゃばっているのです。やっぱり世の中誰かが音頭取りといいますか、実行する人がいないと事は起こらないと思ふのです。日本人の多くはえらく謙譲の美德という変な言葉があって、謙遜が変な遠慮になって、遠慮がもつと退化していつてもやらないことが美德となってしまふんですね。だからもつともつと良いでしゃばりさんが増えてほしいと思ふます。せっかく厚生労働省の方がそういう良い発想を持っておられるのでしたら、この際国民がござって、『厚生労働省、いいところ。』って褒めて育ててあげになったらきつともつと良い方向にいくと。行政は叩いて潰すのではなく、褒めて育てないと駄目だと思ふます。兵庫県、先程ちょっと良いって褒めて頂いたのは、私共がうーんとゴマをすって褒めて差し上げたのが少し効果があったのかなって手前勝手なこと申しました。失礼致しました。

#### 山崎

有り難うございます。来年あたりは松田会長を元いでしゃばりすとクラブでも作るうかと思っておりますが、あの先程の備酒先生がおっしゃった質問に戻りたいと思ふのですが、これは多分皆様方にお答え頂くことになると思ふます。

実は私の方から申し上げれば、先程のエデンの園の代替作のビデオを私は持っておりますが、どうして私

自身が色々な所で見せないかという、多分それに走ってしまう施設が多いだらう、これはお金儲けになると思ふ様な不貞のやからが残念なことに動物業界にも福祉業界にも沢山います。そうなるとう体どうなるのということ。館石さんが見せて下さった非常に素晴らしいプレゼンテーションも「こりゃ一発、老健でも立てるよりこっちの方がいいべ」と思ふような福祉関係者が出てくるとそれは一体どうなるのかというあたりです。ですからここで皆様に論じて頂きたいのは、その情熱をどのように、本当に真実として伝え且つ皆にルールを守ってやってもらうかと。それに対して一番の弊害になっている今の日本のメディアをどう変えていくかと、是非お話し頂きたいと思ふます。オームロッド先生には英国でのメディアの、いわゆる美しい部分のPRの弊害が出ているのかどうかというところをお伺ひしたいと思ふます。



#### オームロッド

はい、そうですね。色々な人が良いことばかりを見てそっちへ行ってしまう。お金が儲かるとか、あるいはこれは綺麗だからとこれだけで出来ると思ってしまう。そういう傾向があると思ふます。それはやはりメディアによってかなり影響を与えられていると思ふます。そのところをどうでしょうか。やはり間違った情報が与えられると困るのですが、そのところが難しいかと思ふます。英国におきまして人と動物の絆は非常に教育を受けたジャーナリストがタイムズやガーディアンなどにベストな記事を書いています。正確性に優れたものがあります。私思ふのですが、この絆がよく理解され、尊敬されるには、やはりヒューマンアニマルボンドの情報が学部のカリキュラムにいつて、そして全てのヘルスケアのプロフェッショナルのトレーニングにも取り入れられるべきだと思ふます。そうすることで正しい情報が伝わると思ふます。短いレクチャーとか、あるいは短い記事などあるかもしれませんけれども、しかし他に専門家とコンタクトが取れるようにしておくということ、かなり正確性が保たれると思ふます。この今西乃子さんが書かれた本〔※ドッグ・シェルター 犬と少年たちの再出航(たびだち) / 金の星社〕があると思ふのですが、アメリカの若い男の子の本で、そして刑務所のプログラム、その一連の本で様々な人と動物の絆を取り扱っています。そして一般の人が読めると思ふます。そういう方向で一般的には理解が深まると思ふます。やはり一般

の理解というのがプロの人の教育と共に大切です。

#### 山崎

では今度は逆に松田先生の方からどうぞお願い致します。

#### 松田

私達が動物と関わっているということは、本当にかげがえのない命を持っていると普通には言われますけれども、私、逆説的にみますけれども、動物と人間は違うから良いと思うのですよ。もしも動物と人間が全く同じ位置にいたら、私はとても牛や豚を食べるわけにはいかなくなるし、そしたら人間が死んだら人間の肉もたないから食べますかという話になりかねない。尊い命というところでは同じですが、動物と人間は違うんだと。こんなことを言うと誤解を受けてまた叩かれるかもしれませんが、でも私は根本的に動物は動物として認めるから動物が大切に出来ると思うのですよ。そして人間は何故人間を大切にするかと思ったら、自分達の同種類の仲間だからだと思うんです。だから人間の肉は食べることが出来ない。だけれども動物と全く違う動物であるというところに私はすごくポイントを置いたら、動物をもっと大切に扱うことが反対に出来るのではないかなと、私は常日頃そう思っていますので、動物と暮らすということにおいて、必要以上にミンクの毛皮を着せた犬、そんなの滑稽ですよ。その価値観を認めている今の日本の社会というのは、すごく歪な方向に行きつつある危険性も含んでいると思います。だから動物に対して動物が暮らしやすい世の中にするということは、人間が人間として暮らしやすい世の中になるということとイコールになって欲しいなと思います。

#### 山崎

有り難うございました。それでは次に備酒先生お願い致します。

#### 備酒

あのプロデュースという言葉がキーワードにしたいと思います。例えば先程のグループホームであっても、まだ世間ではそんなの実現しようと思っていない人の方がはるかに多いんですよ。女は家で飯を炊いておけという世界がまだ現実にあるんです。そこに今から真実、正しいものを我々は頭で考えてクールに実現していかないとはいけません。伴侶動物も然りです。ペット以外という言葉で動物の名前が通じることがまず無い世の中です。そこに我々は頭で考えて、心で感じたものをプロデュース、作り上げていかないといけない時に、常に大事だと思うことは分からない人に伝える言葉を使うということです。実は大阪でオリンピック招致委員会で働いた人に聞いた話ですが、ヨーロッパのIOC委員の皆さんに大阪を紹介する時にパンフレットを作ります。じゃあ皆さんアイデアを考えて下さいと委員に言ったら

ころ、出てきたのはキッチンオブジャパン、天下の台所大阪、それから人情の町大阪。それを英語にしてIOCに送ったら解らないわけですよ。キッチンオブジャパンって見たらきつとびつくりするでしょうね。そこで彼は非常に知恵のある男で、徹底的に調べて最終的にはシェイクスピアを東洋で始めてやった大阪にしたらしいんです。伝え側が伝えたいことは勿論大事なのですが、伝えたいことを相手に伝わる言葉を持つというのは、実は私を含む我々全ての人間が全て考えていく必要があるのではないかと思います。



#### 山崎

有り難うございました。それでは次に館石先生お願い致します。

#### 館石

先程備酒先生からご指摘のあったことはとても重要なことだと思うんですね。安易な参入が出てこないのかというお話ですが、沢山出ています。今グループホームは3700を越えているのですが、景気が悪いこともあって、遊休地を抱えている不動産業者さんや建設業者さんとか全く今まで高齢者介護に縁の無かった方々が多数参入してきています。その異業者参入が即悪いのではなくて、きちんと勉強して十分な準備を整えて良いサービスをしてくれることは歓迎なのですが、必ずしもそうではない。空いている土地にマンションを建てても入居者入りませんよね。グループホームを建てれば確実に埋まるのです。ですからそれだけの理由で入ってきている人達が沢山いて、そこをどうするかが非常に課題です。ですから今日は時間が無いので詳しくお話しませんが、他の介護保険サービスと比べてハードルは決して高くないのですが、入ってきた後の質をどう確保するのかという意味では、かなりきめ細かい政策を実は一つ一つ作っています。研修を義務付けたり、職員の質を高めるための締め付けだけではなく対応型の良い方向に導いていく為の政策もきめ細かくやっているのですが、今ご覧頂いたレベルでのケアを提供出来ているグループホームは多分全体のせいぜい5%ほどだと思います。そこそこ良いところは全体のおおよそ3割位で、まだまだ形だけ、外形上グループホームという真似をしていても、鍵をかけてお年寄りを閉じ込

めていたり、オールドカルチャーのレベルに留まっている施設も多数ありますので、一步一步良い方向に導いていくのが行政としての最大の課題であります。今日は具体的な政策は省略致しますが、重要な問題だと認識しております。

#### 山崎

はい、有り難うございました。今のパーセンテージというのは、私動物介在療法とか施設内飼育を考えていて、多分同じ位のパーセンテージだと思います。やっているところは沢山ありますけれども、良質なものは多分数%、そこそこやっている所が3%あったらいいかなと。特にグループホームの問題やそれから老人の介護の問題というのをもう一回ペットに結びつけて考えてみますと、オームロッド先生がおっしゃった人間の福祉や医療の専門家に動物を入れることの重要性やそれからきちんとした手順を本当に一学期だけの講座でよいから入れるということが大切なんですね。ところが昨今それをばき違えて、動物をそこに入れる専門家を作ってしまえというような方向に実は教育が進んでいる、それは間違いなんですね。人間の施設を運営する専門家が、動物や植物をどうやって入れれば一番効果的なの？どの動物の専門家に聞いたらいいの？ということ自分の福祉や介護の授業でその道の先生に聞いて、自分が実際に現場に出た時には怪しいものには騙されないというちゃんとした知識を持って動物を受け入れる体制を作れば、おそらく質はかなり良くなってくると思います。ですからオームロッド先生のおっしゃったことは、まさに私は同感です。それではフロアからご質問やご提言を受けるとお約束しておりますので、時間も本当に短くて申し訳ございませんが、どなたか各先生方にご質問がございますればどうぞ挙手願いたいと思います。如何でしょうか。コメントでも結構ですが。皆さん、圧倒されて……。はい、どうぞ。



#### 質問者

先程ビデオを見せて頂きましてすごい涙流して見ていました。少し言葉が詰まっているのですが、ペットの素晴らしさなど自分自身が体験していてすごく色々なことを考えて言っているのですが、ペットを好きな人と嫌いな人がいてと思うのですが、それを認めて嫌いな人も受け入れていく社会じゃないといけないと思っ

ているのですが、そこでホームの中でも動物が好きな人と嫌いな人の中でトラブルなどトラブルはありますか。

#### 館石

トラブルになったという事例は聞いております。非常に狭いグループホームですとゾーンを分けるということは難しいのですが、少し工夫しますと動物好きの人が居間的に集える所と、自分は動物が苦手という人は自分の個室を中心に別のスペースにいるというようにトラブルを回避するようなケアの組み立て方は可能ですから動物を飼っている施設では皆様それなりに工夫をされています。

#### 山崎

有り難うございます。よろしいでしょうか。もう一つ起こりうるのは逆に皆が可愛がりたがって取り合いになるというのがもう一方の極端であるので、両方から管理をしないとイケないと思うんですね。特に後者のほうは動物がどっぷり疲れてしまいますので、そちらのほうの配慮も必要だと思います。その他にご質問如何でしょうか。メアリー氏どうぞ。

#### ワイアム(前 SCAS 会長)

英国から日本に参りました。今日色々なことを学べたと思います。特に高齢者に対する尊厳ということ。それを忘れがちになりやすいと思います。そしてやはり色々な責任、また尊厳がありますが、しかし歳をとりますと今までやっていたことが出来なくなる或いは選択が出来なくなるということがあります。英国では今、この保険が重要なことです。ナショナルサービスフレームワークということで、高齢者の部分を、先程お話があったように携わっています。ここで非常に重要なのはジェンダーチョイスということ。健康に対して自分で選択肢を持っているべきだということ。患者さんもどういうケアをしてもらうかということを選べるようにしようということです。今日お話に出てきたことは素晴らしいことだと思います。尊敬をし、それがまた確認されているということ、そして伴侶動物もとても重要な存在だと思います。やはりそれをより明確にするためには重要だと思います。そしてそれよりも重要なことはこの伴侶動物の問題です。このコミュニティーで高齢者の尊厳を保つためには選択権を持ってもらうべきです、そしてそれを尊重する、そして最後の日まで幸せにやっていけるように努力をするということです。ですからこれだけの方々が集まって、そして経験を分かち合うということ、素晴らしい午後だったと思います。有り難うございます。

#### 山崎

Knots の冨永代表もさぞかし喜んでおられることだと思います。彼女はメアリー・ワイアム先生とあって、オームロッド先生とご一緒に SCAS から日本にお見えになっておられる先生です。先生のおっしゃった、環境がご

老人にも尊厳を持たせるものでなければならないというのは、まさにその通りだと思います。そろそろまとめに入らなければならないのですが、パネリストの先生最後に一言何かどうしてもおっしゃっておきたいことをお考えになってご発言を願いたいと思いますが如何でしょうか。

**松田**

動物福祉も人間の福祉もある意味同じだと思うんですね。本当に幸せになるということ、不幸せな動物を持ってきて人間に「はいセラピードッグですよ」といってもそれは何の役にも立たないと思うんですね。だから幸せな動物を見て幸せな心を貰うということでは成り立たないということを皆さんよくお考え頂いて、無法な動物の扱いをする人がいれば「間違っていますよ」と言える社会でないといけないと思います。私は動物福祉の立場でものを言う人間ですので、動物第一ということでお許し頂きたいと思います。動物第一だからといって、人間を粗末にしなさいというつもりは毛頭ございません。人間と動物、同じに大切にしないといけない、お年寄りも若い人も赤ちゃんも皆大切にしたいと思います。

**山崎**

有り難うございます。備酒先生お願い致します。

**備酒**

先程出てきた多様性を如何に実現していくかということです。その為には熱い心で感じたものをクールな頭で考えて、それをどう世間に伝えていくか。そのプロセスを抜いてしまって気持ちの中で留まってしまっただけ、とても残念なことになるのではないかと。どちらかといえばネガティブな言葉で閉めたいと思います。有り難うございました。

**山崎**

それでは館石先生お願い致します。

**館石**

せっかく今日呼んで頂きましたので、後程で結構なものですけれども、高齢者のケアを専門にしている専門職の人達が動物とのふれあいを提唱されている方々から、例えば研修の機会だとかお招きをしてお話を伺いたいとした時に、どんな内容・どんなカリキュラムでどんなことが期待出来るのか是非情報を頂ければと思います。

**山崎**

はい、わかりました。では、オームロード先生お願い致します。

**オームロード**

もう一度強調したいのですが、注意深くプランニングをするということ、ハウジングポリシーにおいてペットを

どういうふうにするか、栄養を考えるとということだけではいけません。具体的なアプローチがとても重要で、注意深い計画が必要であります。そして色々な形でコンタクトを取ることが必要であります。熱意を持っているけれども知恵が無いと、知識が無いということです。ですからこういうことを改善することによって、素晴らしいプログラムを作っていくことが出来ると思います。通常よりもっとケアをするということ、特にグループリビングなどで動物を飼う場合には注意が必要であります。高齢者の人というのは世話が出来ないペットは飼うべきではありません。10年も15年もお世話をしなければならぬわけですから、高齢者の方が選ぶ場合には年をとった動物を選ぶということでもあります。動物の救済センターなどに年をとった動物がおります。また年をとった人と年をとったペットが、一緒に年をとっていくということは素晴らしいことだと思います。



**山崎**

去年、三宅島の被災犬12歳が家に来ました。12歳ということで引き取り手が全然いなかったんですね。2年ほどシェルターにいた後に家に来ましたけれど、年を取った犬を引き取るのは嫌だとおっしゃる方が沢山おられるようです。しかし今オームロード先生がおっしゃったように、自分がこれからどのような生活をするのかと考えたら、年を取った落ち着いた子を引き取るというのは、非常にオプションとしては良いし、両方とも助かる方法だと思います。

最後になりましたけれども私の拙い進行で時間が遅れてしましまして申し訳ございませんが、今後のやはり高齢者と動物を考えるにあたって一つだけ皆さん肝に銘じて頂きたいのは、「人に優しい環境は動物にも優しい」「動物に優しい環境は人にも優しい」ということです。虐待の問題はここでは全然出てきませんでしたけれど、実は幼児虐待とか人間に対する暴力的犯罪と動物に対する暴力行為の結びつきというのは、神戸でもかなり明らかにされていますし、全国そして全世界でも、実はその事実は駆け巡っています。今まではDVと幼児虐待・それから反社会的行動を動物虐待と結び付けていたのですが、最近ではもう一つの虐待・老人虐待というのがフォーカスされてきて、動物虐待が行われている家庭で老人も同時に虐待を受け

ているというような状況というのも最近発覚してまいりました。ということでやはりさっきの言葉に戻る、人間に優しい環境と動物にやさしい環境はまさに同じであるということと、それから、やはり自分をそして人間を愛せない人は動物も愛せない。動物が好きだけど人間は大嫌いというのは、これはちょっと病理がある。むしろありえないことだということをしかり皆様も頭の中で、ご自身で考えて頂きたいと思います。では、これでまとめとさせて頂き富永さんにマイクを戻したいと思います。有り難うございました。



富永 (Knots 代表)

座長の山崎様、どうも長い時間、大役をお引き受け頂いて、いつもご迷惑をおかけして申し訳ございません。有り難うございました。

そして遠くからいらして頂きました、エリザベス・オームロッドさんにもう一度暖かい拍手をお願い致します。

それからさすが厚生労働省の方だと私は先程から感心して聞かせて頂きましたが、本当に館石様わざわざ東京からお見えになられましたので皆様方拍手を御願い致します。

館石様と同じ位、もしくはそれ以上、備酒様も同じ兵庫県にありながら来られるのにかかったんじゃないかと心配しております。但馬からわざわざおいで下さいました備酒様に拍手をお願いします。

そして私共が最も尊敬する私達の活動の指針ともいえる松田先生にもう一度拍手をお願い致します。

動物の問題というのは、こういうことを重ねておりますと、本当に人の問題なんだなあと考えることが多いです。本当にその時に大切なことというのは思いやりだと思います。違った立場の人のこと、人のことを考えてあげられる能力だと思います。私はそれを想像力だと思っています。ですから皆さんもこういう機会に沢山お出になられてそういう能力を磨く努力をして頂きたいなと思います。今回は私共、動物ということと高齢者という形で情報を提供させて頂いたんですけど、皆さん本当に、実はパネラーの方々も、凄い情報を得られる良い機会になられたのではないかと思います。皆さんだけでなく、パネ

ラーの方も大変なお勉強をされたのではないかと思います。ですから皆さんのお話に度々、各分野の専門家が集まって、あるいはその問題に係わっている人々が集まって知恵を出し合って、様々な課題というのは解決されていくんだと言うお話をされてたと思うんですけども、今このシンポジウムを経験されてそういう姿というものが少し、皆様の中でイメージ出来たのではないかと思います。実は私抄録の方に書かせて頂いたんですけども、この様なシンポジウムを重ねていくことで Knots は凄く沢山のご縁を頂いております。実は Knots という名前は結び目という意味です。この様な Knots というか結び目が本当に私達の中で生まれているんです。こういう財産というのを生かしていかない手はないんじゃないかなと、最近感じています。ちょっとかつこいいんですけど神戸 Humane Knots Center みたいな形でですね、英語でいうとかつこいいんですけれども、ヒューマンというのは人道的なという意味です、そういうような形でこういった課題が出た場合に人道的な解決方法を考えていく場をコーディネート出来たらなというような夢を持ち始めました。というのは先程から言いましたように皆が出来ることを集めていくことで課題というものは解決していくものだと思うからです。ちょっと私の夢をチラッと語らせて頂いたんですけども、まだまだこの先生方に鍛えて頂きながら、色々 Knots を運営してまいりたいと思います。

Knots の一つの紹介をしたいと思います。なぜこんなに私達が本当にこういうシンポジウムをすることが出来たかということで、実は各方面の方々の様々なご支援を頂いております。まずご後援をこんなに沢山貰っているシンポジウムも珍しいと思います。せっかくなのでご紹介させて頂きます。環境省、厚生労働省、兵庫県、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、社団法人兵庫県獣医師会、社団法人神戸市獣医師会、財団法人日本動物愛護協会、社団法人日本動物保護管理協会、社団法人日本動物福祉協会、社団法人日本愛玩動物協会、社団法人日本動物病院福祉協会、在大阪連合王国総領事館、以上の団体からご後援を頂いております。

それから助成というものを NPO 法人は頂けますので、ここポートピアホテルの関連でございしますが、財団法人中内力コンベンション振興財団、株式会社損保ジャパンちきゅうくらぶというところから助成を頂きました。

そしてご協賛と致しまして、アサヒビール株式会社、近畿タクシー株式会社様よりも頂いております。最後になりましたが、このコンベンションを3年に渡って支えて頂いておりますのは最近新しい社名に替わりましたが、ネスレペリナペットケア株式会社様よりは毎年このシンポジウムを実現するために3年間格別のご支援を頂いております。最後になりましたが改めて御礼申し上げます。あちらに広報室長の伊藤様がおみえです。

本当に有り難うございます。メアリーさん立って頂けますか。一緒においで下さいましたメアリー・ワイアムさん

です。先程ご紹介がありましたように SCAS の前代表でいらっしゃいます。実はこの方は保護監察官でもいらっしゃいました。先程、刑務所でのリハビリテーションのお話ですとかも、中心になって実現なさった方です。この方々の・・・エリザベスさんもそうですけど、お二人の

存在というのは、日本の関係者にとって大変勇気を与えて下さるものだと思います。実は明日になるんですけどもアートカレッジ神戸という所で、今度はメアリー先生の方が、「子供たちにペットが果たす役割の重要性」ということで、ご案内の方もちょっと入れさせて頂いていると思うんですけども、ご講演をされますので、もし、お時間がある方がいらっしゃいましたらぜひ行って頂きたいと思います。ちょっと福祉から離れるんですけども、楽しいワンコを見たいという動物ファンのために、実は本日から3日間なんとYahoo!BB スタジアムという所で、フリスビードッグジャパンファイナルが開かれております。ネスレピュリナ様の方がこちらもご支援して下さいまして、ピュリナ スカイドッグ チャンピオンシップ ジャパン ファイナル 2003 in Kobe ということで開催されておりますので、またお時間のある方はのぞいて見て頂いてはどうかと思います。

長時間に渡って本当に熱心に受講頂きまして有り難うございました。



発行：2004年3月9日

**特定非営利活動法人 Knots**

〒650-0004 神戸市中央区中山手通 6-6-7-405

TEL/FAX:078-341-5884

URL: [www.knots.or.jp](http://www.knots.or.jp)

E-mail: [info@knots.or.jp](mailto:info@knots.or.jp)

Copyright (c) 2004 "NPO Knots" No reproduction or republication without written permission.